

る。常人は例の口おもく。一句をだに。うち出すかたへにしぞきて。おもてあかめてぞみたりける。酒たけなはに及び。人を酔くははりて。やゝみだりがはしき頃ほひ。常人すゝみ出て。いひけるは。梅丸こそは。其家にておはすればかゝるむしろにて。たゞに過すべきならず。つたへたる田樂の。ひとて。所望に候。品玉。輪鼓。八玉のたぐひ。何にまれ。物し給へ。さらばいみじき見物ならんと。そよのかす。した心には。彼がいやしき種姓をあらはし。恥見せんとて。かまへいひ出たるなりけり。安世は。とかくの詞をまじへず。心ぐるしくおもひをり。梅丸さしうつむきて。いらへだにせず。心しらぬまらうどらは。そはよかんなり。とくくなど催すに。猶ためらひてありければ。すこししらせてぞ。見えたりける。安世やゝ有て。人々の所望も。もだしがたし。雅俗をいはず。何にまれ。興あるべきことを。なせよといふに。梅丸辭すべき詞なくて。閑所に入り。支度をぞなしける。常人ゑつばに入て。くやつ。何事をかすらん。さこそ。あざれゆがみたる姿して出きたるらめ。例のくすしき。博士がほにはふさはしからじ。見てわらはましなど。思ひひける。ほどなく。樂屋にて。物の音ども。ひゞき。吹たてたるに。かつくちりくる。紅葉のなかに。梅丸かたのごとく。装束し。出たちて。青海波をぞ舞出たりける。あしぶみおもゝち。この世の人ともおぼえず。桂殿迎初歳。桐樓媚早年。と。うち詠じたる聲。清くすみわたりに。いみじといふもおろかなり。入あやのほど。なき手をいだして。舞かなでしさま。人々みな泪おとして。感じあへりけり。いかでかく迄に。練じ習ひとりけるよと。安世夫婦はさらなり。ありとある。まらうどの限り。聲うちあげて。ほめざるはなし。舞はてゝ常の服にきかへて。ふたゝび縁にのぼり来るを。客人ら扇ひらきて。あふぎたてゝほむる。梅丸恥らひてかしくまれば。安世聲うちあげてあはれ未曾有の興なりけり。藝能といひ。才智といひ。御邊のごときは。ためしあるべからず。しらるゝごとく我に娘あり。ゆるし給はゞ。御邊にまゐらせん。うけひき給はなんや。いかにといへば。梅丸あまりに。俄なることにて。いらへす。べき詞も出ず。ぬかをつきてかしくまりをるを。客人ら。いでやかしく御はからひにこ

そ。梅丸ぬし。とく領承し給へとすゝむれば。梅丸かしらをあげて。とし頃の御めぐみさへひとかたならず候へば。報い奉るべき期もなく覺え候を。御愛女をさへ給はらんこと。身にとりてかたじけなく。有がたきことにこそ存候へ。いかでそむき奉るべきといらへければ。安世夫婦斜ならず悦びて。春を待て吉日をえらび。婚姻の禮をとふべし。但定まれるおきてなれば。かたばかり聘禮のしるしを見せ給へといへば。梅丸しばし打案じて。ふところより絹にてつゝみたる。尺ばかりの物取出し。扇にすゑて安世が前に置いて云けるは。此一品は。父にて候もの命終の時。とり出して。おのれに與へて語り候は。此一品は我かたみなり。みだりにひらき見るべからず。命あらんかぎり。は。寶として。身を放つことなかれとしめし候ひき。おのれ貧窮なる事は。しらせたまふがごとくなれば。奉るべき物も候はず。此一品は。亡父がかたみにて。いまだ封をだに。解候はぬ物ながら。身にとりては。大切の寶にて候へば。此一品聘物のしるしに奉るなりとて。うやゝしく述べれば。安世手にうちさゝげて。此品いかなる物とはしらねども。當座の聘物。ことに御邊の身にとりては。こよなき寶にてあれば。むすめが生涯の守りともなすべしとて。とりをさめて。人々にいひけるは。かゝるよるこぼしき事。又も有べからず。各々も。こよひは。うちくづして。猶よろこびの酒を過してたべとて。ことさらに。杯盤まうけ出て。夜もすがら。酒のみ遊び。朗詠うたひかはして。いたく興あへりけり。常人はおもふことたがひて。恥みせんと思ひつるを。中々に。かれがさいはひに成りぬるよと。すさまじくおぼえて。物をだにいはず。めしつかふ女ばらしもべなどを。のりしかりて。おのが曹司に入てぞふしける。さるにても。梅丸め。いかでうきめ見せてんと。寢もやらでさまぐと。思ひめぐらしける。しれものゝこころこそ。おそろしかりけれ。安世が家。もとより。内外のさかひ。嚴にて。娘蘭生がすめる所は。おくまりたる所なれば。弟子などいふ者にも。出あひたる事だになし。されど女ばらがとりつたへて。物語するにも。梅丸が姿すぐれて。學ざえの道にかしこきことなど。とりくにもらし聞えければ。蘭生もさる人を。いかで見ばやの心ありける



に。こよひ舞樂の物の音に。おどろかされて。めのわらは一人つれて何事ならんと。庭づたひ。あゆみ出て。かいま  
 見しけるに。紅葉のこのま。きら／＼しきほかげに。みやびて。光る斗。うつくしきをこの。たち舞てをるさま。  
 なるものなくおぼえて。そゞろさむき。こゝちしながら。猶ことはつるまで。見をりて。部屋にかへりて。思ひける  
 は。かれは。何人にか。一定俗人の子にておはすらん。かたちのやんごとなく。見えたるは。此わたりの人には。お  
 はせじ。あはれ女とうまれたらんには。かゝる人を。うしろみ。添ぶしして。世を過さば。思ふ事あらじはやなどさ  
 ま／＼と。おもひみだれつ。よりふしてみけるに。しばし有て。女ばら。そよめき來て。おまへにこそ。御覽じ給  
 はざりけれ。こよひ梅丸のぬしの。青海波舞給へるぞ。世になき。見ものにて候ひし。詠などし給へる聲こそ。身に  
 しむばかり。をかしくおぼえて候ひしか。物語の文にしるして候。色このみの。君だちなどは。物の數にも候はじな  
 ど。ほめのしるを聞て。さてはこよひの舞人はきゝ及びにし。梅丸のぬしにや。つねに。女ばらが口くせに。ほめ  
 物するこそ。ことわりなれと。思へど猶つれなしくりて。聞あたるに。めのとの三條といへるが。出來て。あなか  
 ま。何ごとをか。のたまふ。といひつ。蘭生にむかひて。先聞えしらせまらすべきことの候ふ。父君のゆるさせ  
 給て。こよひ梅丸の君を御むこがねと。定おきてさせ給ひにたるを。うち／＼に聞えまらせよと。母君の仰せて  
 候。といふに。女ども。手うちたゝきて。おまへこそ。いみじき御さいはひは。おはしけれ。あなめでた／＼と。口  
 口に。いひて。どよみさわぐ。蘭生もわりなく。うれしけれど。うち出ては。何とかいはれん。たゞ口おほひて。う  
 ち多みたるを。さし過たる女ども。おしはかりて。おまへにも。したにはうれしとおぼすらん。はや御かほのほど  
 に。うちけふりて。見え奉りたるなどさゝやきあひつ。夜ふけぬれば。格子おろして。みな／＼あがれて。臥所に  
 入てぞいねける。さてあしたになりて。母蘭生が部屋に來りて。しか／＼のよしを。語りきかせ。梅丸が贈りたる。鴛鴦  
 を出して。終身をさめ置て。大事にせよとぞ。いひをしへける。蘭生此袋物をうけ取て。日頃たくはへおける。錦の

さいで。とり出て縫て。此袋物をおし入れ。紐かたくひきゆひてぞ。秘め置ける。扱また。ねぢけ人の常人は。さまざま  
 ま思ひめぐらして。いかで梅丸に。ぬれぎぬきせんと。かまへける。これより一年ばかりさきに。常人蘭生に心をかけ  
 むけるが。むくつけ女。ひとりかたらひて。艶書を。梅の枝につけて。おくりつかはしける。蘭生心もつかで。打ひ  
 らきよみ見て。あさましき事におもひて。やがて艶書を。そのまゝ。返しつかはすとて。梅にむすびつけてやりける。  
 なか垣の。へだてもわかれて。梅がかの。などこゝにしも。にほひきぬらん。うたてしや。  
 とぞ書たる。常人こちなき心にも。此歌のこゝろさたらざらんやは。打みるより。さは。我をいとふにこそとて。其  
 後は。たえていひ出もせざりける。此頃。きとおもひつきて。よし／＼。すべきやうこそあれとて。又かのむくつけ  
 女かたらひて。蘭生が閨に秘めある。梅丸が聘物とて。おくりたる袋物。ぬすみくれよといひける。此女おぞきもの  
 にて。やすくことうけして。蘭生が湯ひきを。ひまをうかゞひて。かの一品を。ぬすみ出で。ふところにおしい  
 れ。ひそかに常人にわたしける。常人よろこびて。中をだにひらき見す。紐の結びめを。紙よりしてつよくひきゆひ  
 て。又の日。梅丸がもとに行て云けるは。御邊近きに。蘭生と。婚姻し給ふこと。われらがよろこび。ますことなく  
 覺え候。但にが／＼しき事の候を。告まらせ候はずは。としごろのしたしみを。失ふ道理なれば。内々ひそかに。  
 告聞ゆる也。そのしさいは。伯父なる人。御邊を。婿と定めて候を。蘭生いかなる所存にか。はなはだうらみ。ふづ  
 くみ候て。夫婦のかたらひは。親たちの御心にもまかすべきことかは。われにも。語り給はて。さる田樂の家の。妻  
 となし給はんこと。あまりに心なき。御はからひにこそ。たとひ父母の。せめてのたまふとも。我は。梅丸が妻とは  
 ならじとて。晝夜なきしづみてこそ候ひしか。けさのほど。おのれを呼よせて申候は。此一品は。梅丸が方より。しる  
 しとて。贈りたる物にて候。見るもうたてく。おぼえ候へば。とく返しやりたく候なり。たしかに。かれに渡して。  
 給ひねとて。とり出て渡して候。さまざまこしらへ。すかして候へども。事かなはず候へば。蘭生がいふまゝに。御



邊にまゐらする也。よく思慮し給へかして。袋物に。おのがはちぶかれたる歌をそへて。出しける。梅丸手にとりて見れば。おぼえある蘭生が筆にて。吾名の梅といふにそへて。いとひ思へるさまを。のべたる歌なれば。しばしあきれて。いらへだにせざりけるが。やゝためらひて云けるは。此度の婚姻。それがし強て。望たる事にては候はねど。師なる人の。さやうにおもむけ給へることに候へば。かしこまり。領承して候なり。しかれどもさうじみの本意に。かなはざる事。餘義なきことにて候。其よし。師のもとへことわり申候はん。といへば。常人より。蘭生が御邊をきらひつるよしを。告給ひては。彼いみじき呵責にあひぬへし。さては。心ぐるしく存候。其事となく。なだらかに事のをさまらんずるやうを。はからひて給へといへば。梅丸如法溫柔の。うまれつきにてあれば。其義につきては。御心をくらしめ給ふべからず。よくはからひてんとて。常人を歸しやりて。ひそかに心に思ひけるは。蘭生が吾をうとめるは。種根のいやしきを。きらへるなるべし。師に此事を申さば。吾身の恥のみならず。蘭生がため。いとほしからん。さりとてうちはへ。日を過しなば。婚姻の期。ちかづきぬべし。いかにせばよからんと。さまざま思ひめぐらしつゝ。四五日を過しけるが。とにかくに。吾此所において。ことのさま。むづかしかりぬべし。ひとまづ。こゝをたち退て。このやうをも。伺ふべく。と思ひ定めて。着がへの衣服など。包につゝみ。返しおこせし袋物。腰にさし。夜にかくれて。まどひ出にけり。又の日。梅丸があらざる事を。人々いひさわぎけれど。よもさることあらんとは安世も心つかず。所々さがしもとめて。影をだに見ず。といふを聞て。おどろきてこはいかなることならん。と夫婦はたゞあきれに。あきれたり。蘭生は。すゞろにむねふたがりて。衣ひきかづきて臥をり。女ばらは。もしまよはしの神に。さそはれやし給ひけん。その陰陽師。かしの験者。むかへてなど。ひしめきて。人々物にあたりてさわぐ。國の堺まで。行たる男ども。歸りきて。ふつに御ゆくへしれ候はずといへば。いよく心よわりて。せんかたなし。常人ひとり。うちほゝゑみてをれども。もろともにあわてたる顔つきして。はしりありき

ける。安世乳母をちかづけて。もし蘭生がこゝろに梅丸をよろこばざりしやなど。聞きけど。さる事も候はずといふに。さてはかれ心を高くつかひて。かゝるかたみなかに。一生をおくらんは。丈夫のしわざならず。と思ひて去りたるにや。さるけはひなど。見し人やあるといへば。常人時よしとおもひて。答ていひけるは。たしかなる事は。見とめ候はねど。常に腰刀うちたゞきて。出るに車なし。食に魚なしなど。獨ことに申して候ひしを。何ごとぞと答候へば。あだしごとに紛らはして。答候はざりき。その外に聞しりたることも候はずと。例のつくりごとを。鼻もおこめかさずいふ。安世うちうなづきて。さるにても此まゝにすておくべきことならずとて。猶從者などにいひつけて。あまねく所々さがしもとめさせける。蘭生は。其日より枕にかゝりて臥けるが。終にやまひと成て。起もあがらず。安世夫婦また是におどろきて。とかくいたはり養ひて。日を過しけるとぞ

○すのまた川

かくて梅丸は安世が家を出てしるべの方に三月あまり忍びをるほどそのとしも暮て春に成ぬ。いつまでかくてあるべきならず。今はおもひもとむる人もあらじと思ひめぐらして。父のしたしかりし田樂法師の。遠江國にすめるあれば。かしこへ行て身のをさまりをもかたはらばやと思ひて。夜をこめてこゝを出て。遠江をさしてぞいそぎける。道すがらおもひけるは。年頃身にあまるばかりいつくしみ給へる。師にそむき奉り。かうゆくゑなき身と成ぬることおのがゆくすゑは。さもあらばあれ。師なる人のさこそはらたゞせ給ふらめかしこき事なり。あはれいつの世にか大恩にむくい奉るべきなどおもひつゞけてひたすらふる里のかたのみ打見かへりつゝ出ゆきける。この頃春雨降つゞけば。簑笠うちかづきてゆく。わびしきといへばさらなりいりもみする雨風に谷川の水音たかく聞え。たかむらの竹はひまもなく起ふしなびく。雀からすなどのぬれそぼちつゝとびちがふ。羽がひのおもたげに見ゆるもあはれなり。からう



してすのまたといふ川べにつきけるに。此頃の雨にみかさまざりて。渡りをとどめたりと聞て。せんすべなく。立休ひみけるにこなたなるあやしの家。人あまた聲すれば。何ならんとうかどひ見るに。渡りをとどめられし旅人ども。みなこゝにとどまりをり。こよひのうちに水は落ぬべく。さらばあすはとく渡るべければそこにも。爰に宿り給へと。人のいふにつきて。さらばとて。彼家に入て。足あらひて一間に入て見るに。旅人ら。二十人あまり。所々にこぞりあたり。梅丸會釋して。かたへに躰りみけるか。つれづれなるあまり。かはご打ひらきて。筆硯などとり出し。道すがら詠じつる詩歌など。思ひ出るまゝ。筆すさみしつゝ。をりけるに。道にてもとめたる。火うち袋を。膝のあたりに。取ちらし置けるを。かたへに。碁うちあたる。旅人の有けるが。つか／＼とよりきて。梅丸が火うち袋。手にとりあげて。眼を大くなして云けるは。このひうち袋は。けふ道にて。我もとめつるものなり。いかてそのかたはらに置たるぞ。といひつゝ。なかをひらき見て。いよ／＼あやしめるけしきして。此うちに入置つる物なし。さては。はや盗みて。かくしたるならし。いかに。出さずはめに物を見せんずと。いきまき。居だけ高に。成ていふ。梅丸うち驚きけれど。あらそひて。論じいふべきにあらず。とおもひめぐらして。面をやはらげて。云けるは。さては。御邊の物にてこそさふらひつれ。おのれもけふ。道にて求て候へば。それぞと心えて。かたはらに置候なり。内に入置給ひしは。いかなる物にて候か。ととへば。銀一兩を。紙につゝみて入置つ。わぬし。いかでしらざらんや。とにらみつゝいふ。梅丸ふところより小きつゝみ。取出し。うちひらきて。銀とり出で。紙におし巻で。それが前に置て。御疑を蒙り候て。申ひらかんやうも候はず。此銀とり納め給ひて。御いかりを。とき給はなんといへば。手にとり。ふところに納めて。猶うちにらみて。旅にしもあらずば。おのれさておくべきかは。此ごろ。こゝかしこに盗人のほびこりて。物奪ふときく。おれもその同類にこそといふを。人々おしなだめ。さま／＼すかしければ。からうじて。鳴やみぬ。梅丸は。かたはらの人の。おもはん所もはづかしくて。面あかくなして。壁に向ひをり。

しばし有て。かの男。ふたゝび。碁うたんとて。盤にむかひけるに。石いたる筈のふた取て。かたむける中より。火うち袋。ふたりとこぼれ出ぬ。むかひたる男。とく手に取て。是はその。うしなひ給へる物ならずや。といへば。取てひらき見るに。中に銀あり。おのがおぼえある。反古の紙にて。包てあれば。まがふかたなし。さてはさきに旅人をうたがひて。とりかへしつる借は。あらぬ物なりけりと。聲ひきくなしていふ。人々にくがりて。おしあてに人をうたがひて。ぬす人よといひたれば。今さらわびたり共。彼ひと。聞るべきならず。不便なる事なり。などいふ。かのをとこおづ。梅丸が傍にはひ来て。さきには。思ひたがへて。あらぬ事を申かけて候ひき。おのが火うち袋の。よく似て候へば。ふとふしぎなることを。申出して候。今うしなひつる物は。見つけ出で候へば。給り候品は。返しまゐらするなり。さるにても。いみじき難言申て候こと。かたはらいたく。のべ申べき詞もなく候。あはれ御とくにゆるさせ給はなんと。おめ／＼といふを。かたはらにある人々。いさや人をさして。ぬすびとと悪名をつけ。のゝしりしを。たやすくゆるすべきならず。そのたうには。かやつがつらがまち。ゆがむばかり。うちはりて。さて怠状かゝせて。はらを給へなど。口々にいふを。梅丸耳にもいれて。うちあみて。かの男に向ひて。さてはそれがしを。盗人也とおぼされし。御うたがひは。はれ給ひぬとや先々よろこばしくこそ存候へ。さきに奉りつる火うち袋。返し給はんことうれしくこそ存候へ。とかくのたまひし事共は。はらだち給へる時には。さもあるべき道理と存候へば。ひがこととは。承らず候。然るに。ねんごろにおほせ給ふこと。なか／＼心ぐるしく存さふらふといへば。かの男はよろこびて。もとの所に。退きけるを。旅人ども。梅丸がかたを。見やりて。瞻こゝろもなき男かな。いひがひなしやなど。たかみにつきじろひ。いふめり。家あるじ。とくより。此さわぎを聞て。かしらかきつ。案じりたりけるが。梅丸が穩便なる詞に。ことをさまりければ。はじめて。やすく息をぞつきける。かゝるに。年の頃。六十餘なる人。京家の武士と見えて。供人あまたつれたるが。始終を聞て。しづ／＼と立ちて。梅丸がま



へに來りて。さて／＼感じ入たる。御心底にこそ候へ。わかとおはす人の。かばかり御心をのどかに。をさめ給へること。よのつねの人は。思ひ給へられず。もろこしの直不疑が故事にも。をさ／＼おとるまじくおぼえて候。いかなる人にて。いづくへ物し給ふ。旅にておはするにか。くるしからずは。物語し給へといふ。梅丸おのれ。近江國にて。おひたち候へども。親族もなく候へば。今より遠江國に。父なるものゝしるべ候へば。かしこをさして。罷下り候なりといふ。さらば。みなし子にて。よるべなく。たゞよひ給ふにこそ。おのれ。かくとしふけ候まで。子といふものなくて。世中たのみなく過し候也。さして行給ふ。遠江國なる人も。さまでしたしきゆかりならずは。いかに。それがしにともなひ給ひて。都にのぼり給はなん。心のゆく限り。あつかひ物し奉らんと。ねんごろにいへば。梅丸心におもひけるは。遠江とて。たのむべきにもあらず。此人の。かくあつく物し給へば。かゝる人に。つきそひて。都にやのぼりなまし。と思ひて。手をつきていひけるは。たまふがごとく。いづくにしたしき。一族もさふらはねば。御ゆるしを。蒙りなは。御供つかまつりてんといふかの武士大きによるこび。さては。我ほいかなひて。うれしくこそ候へ。此たびは。忍びて。あつたの御社にまうてんとて。出たちたるに候。そこにも。かの御社に。とも／＼まうて給ひて。さてもろとも都にのぼり給ふべしとて。おのが居たる方に伴ひ行て。酒などのませ。そこひなく。物語して。今はひたすらに。おのれをたのみ給へ。おぼつかなきやうには。あらせじなどいふに。いよくたのもしくて。涙ほろ／＼とこぼれぬ。物のついでに。従者なるものに向ひて。とのほ。いかなる御方にか。とへば。嵯峨野に。家つくりて住給へり。むかしはいかめしき。武士にはおはしけれども。今は世のまじはりもし給はず。しづかにかくれ住給へり。世には嵯峨の左衛門殿と聞えたまつる也といらふ。梅丸思ひけるは。いづれにもあれ。なまなまの人にはおはせじと。たのもしく。うれしくおぼえて。それより。此人につきて。をはりの國へぞくだりける。

近江縣物語卷之一終

近江縣物語卷之二

〇くさまくら

近江國なる橋の安世が家にては。梅丸が出行し後。かなたこなた。捜しもとむとて。月比を過しけるに。ある日。一村俄にさわざり立て。伊勢の國より。盗人ども。多勢にておしよせ來とて。資財道具を。持はこび。子をいだき。老たるを負て。東西に逃はしる。安世はかねてより。金銀の類は。穴を掘て深く埋め藏し。あらかじめ用意して置つれど。俄にぬすびと共。ひた／＼とおしよせきて。ときの聲をあげて。さわぎければ。おのれみなごろしにしてくれんずとて。刀に手は掛つれど。寡は衆に敵すべからず。盗人に出あひて。うすでおはんも。なか／＼に恥かゞやかし。ひとまつのがれさらんにはしかじと思ひて。妻が手をとりにて。裏の方より出てぞ落ゆきける。蘭生は此時例の間にありけるが。かしこき心に思ひけるは。たとひ逃出たりとも。女の足にて。はか／＼しくあゆむ事あたはじ。必ぬすびにとらへられて。うきめにやあはまし。いかでひとつの計ごとをかまへて。命をたもち。貞をも全くなして。再夫にめぐりあはまし。と思ひめぐらして。父がすて置たる薬籠の中より。巴豆といふ薬をとり出で。面より手足まで。ひたすらにおし塗て。そのまゝ。おのが部屋にうめきよびてぞ。臥みたりける。さるほどにぬすびと共。ひし／＼と。おし來りて。安世が家に入て見るに。男女一人も見ず。猶かくしおきたる。財こそあらめとて。ひたふるに奥さまへ。踏ごみけるに。蘭生が臥所に。うめきをるを見て。あはれよきたからこそあれとて。引おこして。腰に繩ゆひつけて引出す。いかにするにかと。啼さけぶを。耳にもいれて。ひきつれゆかんとす。蘭生われは病者なり。かくなせそ。といへば。盗人つく／＼と見て。くやつ病者なり。歩行にてゆくべからずとて。肩にひきかけ。うちか



づきてぞはしり行ける。菌生いとけなき時より。深き窓にやしなはれ。あらましき風にだにあたらす。いつきかしづかれし身の。さるむくつけき。あらえびすの。俘となりて。あてゆかれし。心のうち。いかばかりか。わびしくも。おそろしかりけんされど。せんすべなければ。たゞ観音ぼさつを念じ祈りつゝ。身をなきになして。うちかづかれゆきける。から國の人の詞に。むしろ泰平の犬となるも。亂離の民となる事なけれ。とのべたりしは。かゝる事をやいひけらし。世中のならひにて。よからぬ娘もちたるも。親の心には。かたほとや見る。ましてこれは。かたちこゝろばへも。おほかたならぬ。ありがたき女子なるを。思ひかけず。うしなひつる。安世夫婦のこゝろのうちなしさを思ひやりぬべし。これは扱おき。坂上の梅丸は。すのまた川にてあひたる。老人につれだちて。道すがらねんごろに。こゝろざしをつくして。つかへければ。左衛門もなゝめならず。よろこびてよき人をえたりとて。いよくあはれみて。いざなひ行ける。程なく大宮司が家につきて。宮居にまうて。祈願の事などはたして。あしたは。大宮司がもとをたちて。あたり近き名所などを。見めぐりありきて。暮ぬればよさむの里にぞ宿りける。其夜より。左衛門こち例ならずとて。打臥ければ。出たちもとどめて。こゝに逗留して。やまひをぞ養ひるたりける。一日左衛門。梅丸を。枕もとに呼ていひけるは。かねて語りたるごとく。おのれ嗣子なし。うちつけなる事ながら御邊わが猶子と成て。老夫が終りをも。見とゞけくれよ。いかなれば。おことに對面してより。ひたすら。なつかしさそひて。よそ人のやうには思はれず。これもすくせの。約束にこそとて。涙をながしつゝいへば。梅丸も共に。袖をぬらして。忝き仰を承りぬ。たのむかたなき孤獨の身にて候を。とりあげさせ給ひて。御姓をさへ。穢し奉らんこと。心肝に銘じて。有がたくこそ候へといへば。左衛門。うれしげにうちあみて。病牀に。盃とりよせて。かたみに酒汲かはして。親子の契りをぞなしかる。かくひきしろひをるほど。つれづれなりければ。なぐさめにとて。おぼえたる田樂のわざなど。おこなひて見すれば。左衛門興に入おもしるがりて。日々催しつゝ。此事をなさせけり。左衛門やこゝち

さわやぎける比。日くれて。あわたゞしく門をたゞ音しければ。明ていれて見るに。京にありし。家司なる。兵藤大夫にぞ有ける。左衛門聞より。あなきずかはしとて。召入て。いかに。何事にて下りつるぞ。ととへば。兵藤聲をあげて。希有の珍事いできて罷下り候。まづ聞え奉らんは。奥方は盗人のために。殺され給ひしはや。といひもあへず。うつぶしにふしてなくを。左衛門。いかに。事の仔細かたれ。とせきたつ。兵藤。目おしぬぐひて云けるは。君の下らせ給ひて後。我ともが晝夜おこたらず。御たちの内を守り候所。去十七日の夜。それがし清水の御寺につやし候あとにて。夜なか過候ころ。ぬすびと共二十騎ばかりおしり。物ども奪ひて。狼藉に及び候を。若黨どもふせぎ戦ひ候へども。かなふべうもあらず。男女みなちりぐに逃うせて候ひき。某夜あけて歸りつきて候けるに。はや御たちは。火をつけて焼失ひ。ぬすびと共は。ゆくへもしらず。しかるに。御たちの後なる。藪の中に。かしらなきむくろの見え候を。よくみれば。御方にておはしましたき。まがうべくもあらぬ。着ならし給へる。ひはだの御衣。きておはしました候。おもふに盗人ども。財の有所。とひ奉れるを。いらへ給はざりけるにより。殺し奉りたりとおぼえ候。とかたれば。さはゆゝしき大事いできたりと左衛門梅丸をはじめ。ありとある郎等ども。あきれたる計なり。左衛門。目しばたゝきて。あたら命を。盗人のために。失つる。いとほしさに。されど今くゆともかひなし。都はいかに。ととへば。兵藤。都も同じく盗人ども入りて。狼藉いたし候よし。しかし先。此大事を告奉らんとて。いそぎ罷下り候へば。都の事はよくも承り申さずといふ。左衛門。われ仕をやめてより。二十年に成りぬ。されど。かばかりの大事を。よそに見ん道理なし。今より都に歸りのぼり頼光朝臣にちからを合せ。帝都を守護し奉らん。みなく。用意せよといふを。兵藤おしとどめて。伊勢近江に。屯せる盗人ども。何萬騎といふ數もしれれば。かけやぶりて。通らんことかなふべからず。よく御思慮をめぐらされ。しかるべう候といふ。郎等ども。かく旅の空におはして。物の具をだに。用意せざれば。敵に向はん事。計なきに似たり。しばらく爰に止まりおはして。都の



やうすをも。聞せ給へ。と諫むれば。さらばとて。いてちをば留りぬ。かく物騒なる時なりければ。街道にも。人の往來たえて。都のおとづれなど。聞しるべきやうなし。左衛門云けるは。いかでさるべき人をつかはして。都のさまを。聞聞せばや。と思ふなり。たれをかのぼせつかはすべきといふに。郎等とも。目と目を。見あはせたるのみにて。われ行んといふ者もなし。梅丸すゝみ出て。某ゆきて。都のさまをもうかどひて。歸りまらばや。といへば。左衛門。亂軍の中。存亡おぼつかなし。無用なりと。とどめけれど梅丸あながちにひけるは。某罷のぼらんに。は。必定つゝがなく參つくべく候。御心やすかれといふ。左衛門さらばとて。こがねつゝみたる袋とり出てあたへ。安世どのとやらんも。恩ある師なりと聞けば。つゝがなくおはすや。此ついでにありか尋てあれ。おほかたにせば。知がたからん。日頃をふともくるしからじ。必尋あひて來よといふ。梅丸それより旅よそひして。夜の明はなる頃。かしこを出て。都をさしてそのぼりける。さらぬだに旅はうきならひなるを。かく盗人どもの。山野にこもりてある時なれば。ゆきゝする人もなく。さびしく物すごき事。いへばさらなり。たくはへたる乾飯を。水にそゝぎて。食となし。夜はあれたる社などに。やどりつゝ。からうじて美濃國某の郡にぞ着ける。日すでに暮かゝりければ。いづこにやどらまし。と見めぐらすに。森のかけに。大なる寺みえければ。うれしくて。いそぎ門に入て見るに。僧などは見えず。髭おひ。眼おそろしき男どもの。いかめしき太刀よこたへたるが。いくらとなくこゝかしこにむれるたり。梅丸を見るより。つか／＼とよりきて。太刀に手をかけて。おのれ何者ぞ。といふ聲。つきがねのひどくことならず。さてはぬすびとの住どころ。と心づきければ。手をつきて。おのれは尾張の國にすめる。田樂にて候。都にをぢなる者の候ひて。やまひに煩ひて候。と承りて。罷のぼらんとする所。日の暮て候へば宿りたらばやと存候て。思はずむらいを仕りて候あはれ御ゆるしを。蒙りたく存候といへば。ぬす人うち守り見て。たちなみをる者共に向ひて。かやつは田樂をわざとするとや。こよひの宴席には。これにましたる物あらじ。めし入ておやがたなる人

に告聞えてん。といへば。それよかんめりまづこちこといひて。縁のうへのぼせつ。梅丸うち見まはすに。鞆をはづしたる鉾長刀など。あまた壁にかけならべたり。盗み取たる物と見えて。皮籠袋やうの物もあまたつみ。ならべてあり。おもひかけず。をしきに。こは飯もりたるをもて。來て。くはせつ。しばし有て。奥の方へ誘はれて。入て見れば。横座に賊魁とおほしくて。つらつき。にくげなるがしとねにねまりてをり。そのほかたけ高く。おそろしげなるものども。左右にならびて。酒のみをり。梅丸一禮して坐しければ。横座なるぬすびと。うち見て。きよげなる若者なり。田樂には。あたらしものぞなどいふ。かたへなるぬすびと。いざ／＼。ひとて。とく／＼といひつゝ。ぬすみとりたる。笛鼓などとり出て。おもひ／＼に。うちはやす。梅丸いなむべきにあらねば。扇とりて。たちあがりて。聲をかしくうたひけるは

枝さしかはす磯のまつ。みどりのはやし。かげふかし風吹あるゝ夕ぐれば。しら波たかくぞよするなる

とをれかへし。まひかなでければ。ありとあるぬす人ども。聲あげて。あはれいみじくも。舞てけるかな。こよなき上手にこそとほめつゝ。ゑみこたれて興ずめり。此舞のおもしろきにやめでけん。いたくゑひしれたるぬすびとの。よろきひつゝ立あがりて

ぬすびと。鼠は。三輪の神とおなじくて。をだ巻のいとひとすぢに。よるをのみこそたのしめ

とうたひて。そごろに舞ける物か。はかまを燈臺にひきかけて。横さまに。たふれふしてけり。ぬすびとどもどとわらひて。さて／＼わろき舞ふりかな。はじめのには。似もつかざりしといひつゝ。手足とりてかきいだしつ。横座のぬす人。かへす／＼。梅丸をほめていひけるは。汝京にのぼらんずるには。我ともがら所々にありて。道をふさぎてあれば。やすくとほりゆかんことかたし。こよひのひきて物に。これをつかはすなりとて。焼しるしおしたる。ちひさき札をなげ出しつ。これは我ともがらの割符なり。これ持てとほらんには。いづくに行ても。汝に手ざすもの



はあらずといへば。梅丸手にとりあげて。かゝる時には。これにましたる。御たま物もさふらはずとて。いたゞき  
 て。ふところをさめぬ。さて酒宴も事はて。ぬすびとら。おのゝく臥所に入て臥ぬ。梅丸も。くりやの方に出  
 寝たりけれど。いもねられねば。起いで庭の方に出けるに。はるかに女の泣聲の聞ゆれば。あやしくて。何ならん  
 とうかがひけるに。をりから。ふしまちの月はなやかにさし出で。物のくまなく。あざやかに見ゆれば。かの聲する  
 かたを。たどりつゝゆくに。堂のうしろにあたりて。樹どもおひしげりたる所ありて。かたへは墓所なり。物すごき  
 事はんかたなし。入て見れば。女のこゑいよゝ高く聞ゆ。なき人のしるしの石など。ころびたふれてあり。かな  
 たこなた。路をもとめて。聲するかたをすかし見れば。はたち計なる女を。あかはだかになして。あふちの樹にく  
 り置たるなりけり。いかなる人ぞとへば。女おもてをあげて見る。すこしおぼえあるおもゝちなれば。猶ちかうよ  
 りて見れば。安世が家につかはれし。あてきといひし。婢にぞ有ける。おどろきて。いかに。かゝるめを見るぞと  
 いへば。女も聲あげて。梅丸君にこそおはしけれ。吾をすくはせ給へといふ。梅丸。おと高し。聲なたてそ。定めて  
 ぬす人にとらへられしなるべしとて。いましめ解て。かたへにある衣とりて。うちきせて。ことの仔細ひそかに語る  
 べしといへば。女涙を拭つゝいひけるは。わぎみのゆくへなく。成給ひにし後御かたは。ふかくなげき給ひて。御  
 床に臥て起あがり給はず。しかるに思ひがけなく。盗人どものあまたおしきたりて候へば。とのはじめ。われひ  
 と。足にまかせてにげ出でさふらふなり。御方はいかにならせ給ひしにか。わらはが逃出し時まで。わが君の御かたみ  
 なりとて。贈りたまひし袋ものをば。御肌をはなさずもたせ給ひけるが。一定盗人のために。とらへられ給ひつら  
 ん。わらはもこゝにをるぬす人に。いけどられて候なるを。かれが心に従はざるを。はらだちて。かゝいまして候  
 なり。おそらくは御方にも。かゝるめをや見給らん。とおしはかり候へば。かなしさやらん方も候はず。といひてな  
 く。梅丸いぶかしければ。猶とひけるは。蘭生は。吾をうとみて。袋物に歌をそへて。常人を以て。吾方へ返しおこ

しつ。しかるにおことがいふ所。大に相違せり。いかなる事ぞとへば。女いかでさること候ひなんや。御かたに  
 は。過し青海波の夜。かいまみせさせ給ひてより。御心あこがれておはしつれば。かの御袋物をば。大事の物とした  
 まひて。晝夜御身をはなさせ給はざりしはやといふ。梅丸其しなこれにありとて。ふところより。かの袋物とり出た  
 れば。女うち見て。それは御方の。書の中に挿せ給へる。葉となげし物いれたる袋にて候。いかにして。うせける  
 にか。見え候はて。日ごろになりて候。ひらきて。御覽じ候へ。といふに。紐の封じめ。口にあてゝひきはなし。と  
 り出て見れば。内に又ひとへなる物に包てあり。猶ひらけば。げにいひしにたがはず。蘭生が詠歌の短冊どもを。か  
 ら木もてつくりたる。葉にあはせて。入おきたるなり。梅丸猶うたがひとけず。常人が持きたりし。梅の歌を出して  
 見せければ。女うちわらひて。それはこそ春。常人のもとより。梅の枝に。文むすびつけて。むくつけきことを書  
 て。まゐらせしを。御方のむづかり給て。返しやるとて。よませ給へるなりといふ。さては常人がたくみて。はから  
 ひたる事にこそ。われは。親とたのみつる人の仰にて。いま都へのぼるなり。道すがら師なる人。ならびに蘭生がゆ  
 くへも。たづねて見んといへば。女御方は。御かたみの品を。身につけて。持ておはせば。それをしるしに。尋させ  
 給へといふ。心えつ。かの一品を證據として。尋ねて見ん。おことは。今より尾張の國あつたをさしてゆくべしこれ  
 よりあなたには。盗賊もあらざれば。心やすかるべし。とうゝいそぎ物せよ。とをしへて。こがね取出て。手にわ  
 たし。竹垣をおし破り。女が手をとりに引いだし。道を教ておとしやりつ。われも爰にありては。ことのさまむづか  
 しからんとて。やがてすが笠うちかぶり。すそ引からげて。都の方へとぞいそぎ行ける。

山のとね

こゝに夜双丸といふぬすびとあり。袴たれが羽翼とたのみたる者にてありける。近江國にをりて。大寺の法師ばら



を。追出し。みづからそのあるじと成てあまたの盗人をしたがへ。錦織のしとねに坐し。山海の珍味をあつめ。ほしきまゝに。をگریてぞ住みたりける。あるひ俵にせる女ばらを庭にすゑならべて。夜双丸。縁に出て。あらためるける中に。老かゞまりたる姫あるに。めをつけて。何者そとへば。姫泪をながして。みづからは山城のくにの。かたるなかに。住る者にて候。かう歳たけて候へば。命も何かをしく候はん。とうく。いかにもはからはせ給ひねといふ。夜双丸。おのれたくはへ持たるたからなどあるべし。いづくにかくし置たるぞといへば。世をいとひさふらひて。さる山里に住候身の。なてふたからをか。たくはへ候べきといふ。夜双丸。姫がさまを見るに。あかしみたる。布の衣きて。をれば。此姫。人がらはあてに見ゆれど。衣をみれば。いやしきものと見えたり。くやつも。ゆかりの者ありて。たづねもぞくる。ひとやにこめ置て。多衰丸が陣に。おくりやるべしとて。引たてさせて出しぬ。扱此ほかに。とらへたる女はなきかといへば。此女ばらの外に。やまひに煩ふ。わかき女一人さふらふといふ。此夜双丸。ひたひはれて。口おほきく。鼻の穴は。そらさまに向ひて。鬚がちに。見ぐるしき男ながら。いみじきいろこのみにて。ありければ。わかき女ありと聞き。大によるこびて。さるものいかで見せざりし。とくひきいませといひつけやる。やがて来て来る女をみれば。白きあやの衣かさねて。うはぎには。ゆるしのいろの。わりなう。つややかなるを着て。人がらあてなるが。袖は涙にぬれひたして。なよ／＼として。いできたり。これなん安世がむすめ。蘭生にありける。顔手足などの腫て見ゆるは。盗人に手さゞせじの計ごとにて。すべて身のうちに。巴豆をおしぬりければ。かうあやしき。病者のさまとは。成にたるなり。夜双丸うちみるより。けしうはあらぬかたちかなとて。そぞろに涎ながうたらしめて。まもりをりて。かしらをおあげよといひて。ふりあふぎたるを見れば。おもてあからかに腫たりて。たゆげなるさまに。いきつきをり。かれを病者なりといふは。かく面の腫たるをいふなりけり。こは何ばかりのことにもあらじ。日ごろへばやがて癒ぬべし。此女人にうりわたすべからず。とどめ置て。我がたはらはなはずめ

しつかひなん。先こゝにのぼせよといひて。縁にのぼせ。すりよりて。たはれかゝるを。女くるしげなる聲して。みづからは。ことなるやまひにかゝりてさふらふ。此やまひ。ちかづきよる人にうつりて。からきめ見するなり。かならず。あたりへなより給ひそ。といへば。なてふさる事あらん。よしや少々うつりたらんも。くるしからじといひて。ひきよせて。つといたく。女あだ／＼しき御心にだに。おはさずば。いな舟の。といひて。口おほへば。夜双丸は。うつ／＼心なく。たましひ飛で。大空をかけるこゝちしつゝ。いもじが鞆をうごかすやうなる。鼻息して。なにか／＼。といひて。すりよれば。蘭生ふところの内より。かの巴豆を取出し。みづからひそかににぎりたるを。さても此手のうつくしきよ。といひて。舌を出してかいいぶりて。あなうまや／＼。甘露もかくこそ。などいひたはれて。猶ねんごろに。ねぶりをはりて。人めをもしらす。ひぎの上にいだきのすれば。蘭生。人こそ見れとておしめるやうになして。両手に。夜双丸がつらを。おさへて。かの巴豆を。おしぬり／＼するを。おのれを愛すとおもひて。よろこびて。云けるは。けふより。此女人。我つまとさだめてん。盃もてこや。などよばりて。とりあげて。二ツ三つのみで。脇息によりて。ひた／＼と。蘭生が顔を。守りつめてあたりけるが。俄につらをしかめ。はらをおさへて。あなたへがたし。あくたのおこりて。はらのいたむぞ。あないた／＼とて。立あがりて。腰をかゞめて。女に向ひて。しばしこゝにあれ。われ厠に行てこんとて。物さわがしく。奥さまへ。はしり入ぬ。蘭生はおそろしき中にも。さすがにをかしくて。ひとへに此薬のしるし見するなり。とおもひて。心のうちに。佛神を念じたり。夜双丸。ふた／＼び出きて。いかなるにか。俄に痲病といふやまひに。かゝりたり。郎等ども。とう／＼醫師をよびきたれ。ひとつには我此痲病をいやし。ふたつには。此女人の腫たるやまひ。治させなん。やおれ郎等どもとよべば。一人のぬすびと。すゝみ出で。夜双丸が顔を見あげて。驚て。あれ見給へ人々。我親がたのかほの俄に腫ふくれて見ゆるはや。といへば。ならびたるぬす人ども。うち見て。は／＼とわらひ出す。夜双丸。手をあげて。おのが面をさぐ



り。又手をうちかへし見えて。さて〜といひて。聲うちあげて。手さへしたゝかにはれわたりたり。此やまひ。人にうつるなりと女が告たりしは。誠なりけりはやくもかうさまに。我身にうつりぬる事よ。といひさま。兩の手してはらうちたゝきて。あらいたや〜。はらのうちなる蟲の。五臟六腑を。ことごとくくひさいて。寸々になすにこそ。あなたへかたし〜。ふたゝび厠にのぼりてんとて。はしり入ればならびあたるぬす人ども。かつわらひ。かつはらだちて。此女め。いみじきやまひを。我おやがたにうつしつる。おのれいみじき罪人なりなどいふほど。夜双丸。犬のあるくやうに。たかばひにはひもこよひ出きて。はかなきこねわして。ぬすびと共に向ひて云けるは。われみづから。あめのしたに。ならびなき。英勇とほこれりしかど。たゞわづか。ふたたびばかり瀉したるに。たちまちもよとせの。翁とはなりにたり。といひて。大息つきて。今はせんかたなし。我此女と縁なきなんめりとう〜彼をば。さきの姫ともろ共に。多衰丸が陣に。おくりつかはして。賣わたすべき。女ばらの中に入おくべし。ふたゝび我まへにおいだしそ。あれ〜又しきなみに。はらのいたむなる。又厠にゆかんずるぞ。人々。よりてたすけよとて。郎等ども。肩に手をかけて。やうやくに。立あがりけるが。ほそき聲して。あはれ。力山をぬき。氣世を蓋ひたりしも。かゝる時はいかにせんとて。女がかたを。うち見やりて。汝をいかん。汝をいかん。といひて。なごりをしげに。打見返りつゝ。かづかれて奥のかたにぞ入ける。のこりたる盗人ら蘭生をひつたて。かの姫をこめおきたる。ひとやの戸を。ひらきておしいれ。錠さしてぞ出ゆきける。蘭生身のあぢきなさを。思ひつゞけて。さめ〜となきるたるを。姫よりて。なぐさめけるは。などてさはなげき給ふ。御身ほど〜。ぬす人の妻と成給ふべきを。さいはひに免れ給ひつ。うきが中のよろこびとは。おぼさずやといへば。蘭生や。頭をあげて。いかなる御かたとは。しりまゐらせねど。ねんごろにとはせ給へる。うれしうこそ。といらふれば。姫おもとはいぐつにかならせ給。親たちは。おはしますや。男もち給へりやとへば。蘭生涙を拭て。ふたおやもさむらふ。又夫と定りたる人も候ひつれど。いま

だ枕をだに。かはさて。行わかれてあり所もしり候はずといへば。あはれの事や。そも佳給ひし所は。いづくぞ。と間に神崎の里とこたへて泣いたす。姫。脊をなでさすりて。わらはとても。摘の身に。はか〜しき事は候はねども。あまりにいたはしければ。心のゆくかぎりは。うしろみしまゐらせん。こゝろづよくおもほせといへば。蘭生手をあはせてなく。姫さてもいかなる事にて。かゝるやまひには。かゝり給ひしとへば。いさや。盗人のせめくるなり。とき〜。さま〜と。おもひめぐらして。いかで此身を汚さずして。夫にも。めぐりあはなん。と思ふより。はかりごとを。まうけて。かう病者のかたちとなり候と。ことのさま。くはしく物語しければ。姫手をうちて。かしこの御はからひや。おもとのやうなる心ばへは。女には。ためしあらじとて。姫も又身のうへを。語り出んとするをりから。盗人等。戸をおしひらき來りて。親かたの仰にてなぢらをば。多衰丸どの陣へ。おくりつかはすなりとて。姫をも蘭生をもひつたて。ぞ出行ける。此人々の身のゆくすゑは。後々の巻にかきつくべし。扱かの梅丸は。ゆきゆきて。近江の國なる大野に。さしかゝりけるに。松かげにわめく聲しければ。ひそかに。うしろのかたにめぐりて。伺ひ見けるに。ぬすびと兩人ならびて。ひとりの法師をとらへて。物うばんとするにぞありける。梅丸松かげより視みれば。法師手をすりて。御佛も照覽あれ。すりもはたごもたくはへぬ。まづしき老法師にて候。ゆるさせ給へ。といへど。ぬすびとら。うけひかず。おのれ。くびにかけたる物こそ。あやしけれ。それ出して見せよといふ。法師これは觀世音の。たびつる物にて候へば。ふかくをさめて。人にも見せて。たくはへ置たる物にて候。御覽せんは。やうなき事なり。といへば。こやつ。をしげにいふこそ。いちぢやうたからには。きはまりたれ。おのれ出さずば。めに物みせんとて。ながき刀ひきぬきて。法師がめささへ。つきつくるを。たとひ命はめさるゝとも。此ひと品は。見せまゐらせじといふ。かれ命にかへて。をしといふなれば。いみじき物なるべし。息のねとめてんとて。刀ふりあぐるを。梅丸いとほしと思ひて。しばし〜と聲かけて。松かげより。をどり出けるを。ぬすびと見て。な



てふ。小冠者。こくわじやめが。けやけくも出きたりつるかな。さまたげせば。ひとつ刀にかけて。此世のいとまとらせんといへば。梅丸ふところより。焼じるしおしたる。割符とり出で。ぬすびとがまへに。なげおきて。云けるは。おのれは。袴だれの君につかうまつる。今まありにて候。吾君の。御仰せには。我陣中。物かゝ人なくて。ことたらず。さるべき法師あらば。ゐてきたれ。との給ふにつきて。おのれこゝかしこ。捜しもとめ候へど。寺々の法師ばら。皆逃うせて。一人もある事なし。此法師。かならず。物書べかんめれば。ひきつれてまらばや。と存じて罷こして候。といへば。兩人のぬすびと。めとめを見あはせて。さては棟梁のもとの人にてこそ有けれ。さらばたゞゐておはせとて。刀を納めければ。梅丸しきだいでして。法師が手をとらへて。引たつるに。法師は。わなゝきふるひて。足もたゝず。梅丸わざとあらゝかにふるまひて。とくあゆめとて。法師が手を。肩にかけ。ひきかづきてゆく。法師ひかれながら。いな。ぬすびとの書記とはならじ。たゞころせくとよぶを。三町ばかり引ゆきて。聲なたてそといひて。法師を地にすゑて。かたりけるは。おのれまことはぬすびとにて候はず。故ありて。都へのぼる者にて候。大とこの危きを見たるより。御命すくひまゐらせんと。かりに。同類の者と見せて。たばかり候なり。ぬすびとよもきたる事はあらじ。これよりいそぎゆかせ給へ。といへば。法師さてはありがたき人にこそおはしけれ。これも観音のし給へるなるべし。さるにてもいかなる事にて。割符めく物をば。もたせ給ひし。といふに。梅丸しかくのやうすを語りて。盗人にもらひつるよしをいへば。法師涙くみて。みとくにて。鰐の口を。のがれ候事。此世ばかりの事とは。おぼえ候はず。おのれは西念と申世すてびとにて候。法師が庵。これより一里ばかり候へば。具し奉りて。こよひ一夜。とゞめまゐらせばや。いざ給へといふに。さらば仰にまかせんとて。つれだちてゆく。さて畔をつたひ。山をこえて。かしこに至りて見れば。大きな山のもとに。ちひさき庵つくりてあり。あたりは松杉などひまもなく。おひしげりたれば。外よりは。庵のやねもみえず。さすがにほそき道あるをめぐりて。はひりの方に入て。錠ひらき

て。ともなひいる。法師火をうちて。みあかしともし。ほたくべてあたらす。さてひえこほりたる。麥の飯を。椀に盛て。むし物にしたる。菜をすゑて出しつ。梅丸おもひかけぬ。御もてなしに預り候とて。飯したゝめをり。西念は。首に懸たる一品を。御佛のまへにすゑ終て。火のほとりに來りて。さてもふしぎの命たすかり候事。謝し奉るべき詞も候はず。さるにても。かくぬすびとの。はびこり横行せる頃。いかなる事候て。都にはのぼらせ給ふ。ととへば。梅丸ありしことどもかたりて。都の有さまをも伺ひ。かつ嵯峨野のあたりへも行て。くはしき事をも。といあきらめたくて。のぼるなり。といへば。さてく感じてあまりある。御振舞かな。都ははじめて。のぼらせ給へば。案内もしり給はじ。法師がすみかより。都へは程も近く候へば。かしこの事は。よくしりて候。けふの御むくに。御供して。都にのぼり候なん。といふを。梅丸さることは。思ひもより候はず。先問まらせんは。観音の給へる物とて。いたく大事にし給ふは。いかなる物にて候か。ととへば法師水晶の玉の如き涙を。はらくと流して。おのれわかき頃は。あらぬひがわざして。世をわたり候ひし。思はざるに。観音の夢に入給ひてかの一品をえてより。心をあらためて。今は随分の修行者と成て候これはながしき。物語にて候へば。又こそ聞え候はめ。さぞこうじ給ひつらむ。とくやすませ給へとて。枕とり出で。うすらかなるふすま出してうちきせ。法師も。かたはらによりてふしぬ。あくれば。飯とくしたゝめて。出たゝんとするに。法師もともく。旅よそひするを。とゞむれど聞かず。梅丸にひきそひて。たち出ぬ。道すがら盗人どもの。居あつまれる所あれどかの焼しるしの札出して。見せつ。ことなくとほりて都にぞ着ける。都にはいみじき武士ども。晝夜をこたらずけいめいしあるきて。用心嚴重なれば。さすがにぬすびとども。はひりこず。さかのゝあたりに。行わたりてみるに。家居は見えず。盗人ども。火をはなちける。なごり。あさましきあら野と成て。物とふべき人だに見えず。そこらたちめぐらひるたるに。夕暮のほど。七十計の翁。杖にすがりたるがきあひたり。梅丸聲をかけて。いかに。老人嵯峨の左衛門どのゝみたちの跡は。



いづくぞとへば。老人つく／＼と見て。見なれまゐらせぬ人の。かのみたちをとせ給は。いかなる人ぞといふ。おのれは左衛門殿の御うちにつかふる。今まゐり也といへば。さぞ候はん翁はむすめなるものを。かのみたちに。奉公に出したる。ゆかりにて。常にたち入て候へば。みたちの人々は。よくしりて候といふを。よき人に出あひたり。北の方はいかに成給ひし。とへば。翁しはがれたる聲して。ぬす人の御くしとりて。持行て候。御からは。かしの藪かけに。葬て候也。とをしふ。ともなひて。入て見るに。かたばかりの塔婆たてゝあり。うち見るに。先涙ぐまれて。さても左衛門どのは。仁徳そなへし人にておはすを。その御妻と聞ゆる人の。かうおもはずなるめに。逢給ひし事。なげきても。あまりありとて。ひれふして。なみだおとせば。西念は。火うちとり出て。たゞう紙なる。香たきくゆらし。ふしをがみつゝ。とも／＼衣の袖をぞしぼりける。梅丸老人にむかひて。此みたちに入來りし。ぬすびとの名をば。きゝしり給へりやといへば。老人ふしぎにその名をしりて候。子細は其夜翁が脊門のかた。俄に物さわがしく候ひつれば。なにことぞとて。出て見候へば。鞍おきたる馬の。くちとりて。いかめしき男の。立をりて。おのれをみて。いかに。此馬にはますべき草やあると申て候へば。おそろしさに。刈とりたる草どもとり出て。つかはして候へば。又酒あらばいませと申て候。せんかたなく。神に奉りたる。瓶子をおろして。出して候へば。瓶子のさきを。我口にあてゝ。とく／＼とのみほして。息きれて術なかりしが。すこしさわやぎぬ。と申て馬の草はむほどのこに尻かけてぞ候ひし。かれが申て候は。こよひ我ともがら。此わたりの。左衛門とかいふなる者の。家にうち入て。寶どもうばひて。今歸らんとする也。かゝる時には。汝らがごとき。まづしき物こそ。さいはひにまぬかるゝなれ。とわらひて申す。うちきくより。胸おどろきて。我むすめの事。きづかはしくて。人をころし給へりや。と問て候へば。たゞ女一人ころしつ。と申す。いよく心ならず。いかなる女をころし給ひつや。といへば。老たる女なりき。わが主の齊光どの。寶のあり所せめ問給へば。いらへをだにせざるばかりか。返りてさま／＼のゝしりたれ

ば。にくいやつとて。かしらうちおとし給へりき。かの左衛門が妻などにや。きたる物なども。けしうはあらざりき。と申すて。馬ひきて。出行て候ひし。さて我妻の軀をも。おこして。やすき心もなく。みて候ひしに。みたちのあたり。火いできて。一時斗過て。しづまりて候ひき。つとめて参りて見候へば。御家の人々少々あつまりて。御からをばこゝに。はふむり奉りき。我むすめは。いかに成にけるやらん。其夜より。ゆくへなく成て候。と語もあへず。聲をあげて泣く。さては御方をころしたる。ぬす人は。齊光にてぞ有ける。かれ今は高島に柵つくりて。大軍にて籠りをれば。たやすく討とるべきならず。いかで計策を。かまへて。亡ぼさばや。と思ひける。さて御親族の人々は。いかにとへば。これは皆都の中にすませ給へり。都は。より光あそんの。守らせ給へば。それにおちて。ぬす人ども入きたらざれば。みなつゝがなくおはします。といふ。さて其夜は。かの翁がもとに宿りて。あくれば。都に入て。ことのさま。よく見とりつ。此ついでに。安世君。蘭生の方の。御ゆくへをも。尋ねさせ給へと。西念がすすむるに従ひて。又近江の方へと立こえけり



## 近江縣物語卷之三

## ○ひはぎのうひ山ふみ

橋の安世は。近江の國にありて。世をやすく。いとなみみけるに。おもはずぬすびと共。數百騎にておそひ來ければ。ひとまづのがれ去らんにはしかじとて。妻が手を取りて。路もなき所をふみつけつゝ。まよひ出たりける。さてもむすめ蘭生は。いかに成し。ぬすびとのために。とらへられしに。一定せり。あはれ。あたら花のすがたを。むくつけき山風の。かどひて。つれゆきけることとおもへば。ひたすらに。足もすゝまず。さるは霞ならねども。これもわりなきほだしなるべし。とまれかくまれ。さるべきすみ所もとめて。むすめがゆくへも。のどかに。さぐりしらんとてしるべあれば。伊賀の國にたちこえける。かしこに安世がめとの夫なるもの。農夫ながら家とみて。こゝろざしまめなる翁ありければ。尋ねゆきて。しかくとかたらひけるに。たのもしくうけひきて。よろづかひくしく。もてなしあつかひけるにぞ。やゝ心やすまりて。しばしは。うきをもなぐさめける。これはさておきて。安世が甥なる。常人は。かのぬすびとのせめきたるさわぎに。おそれまどひて。あわてふためき。逃出て。あたり近き大野まで。はしり行けるが。たくはへたる物ひとつもなく。いづくへゆかんにも。ふびんなり。いかゞせんと。つくづくと思ひめぐらしけるが。いまかく。盗人どものはびこりて。國々にみちたれば我ごときものいかにともせん方なし。今降を乞て。かれが手下となりなば。のちくなりいでんも。やすかるべし。と思ひ定めて。ぬすびとどもの。あつまりる所に行て。いかで御軍勢の内に。くはへ給はなん。いかなる奉公なりとも。つかまつりてん。といへば。盗人ども。いみしく申たり。さらば親かたのもとに。ゐてゆかんとて引つれて。幕引まはしたる陣のうちへ。ともなひ

て入る。こゝにをるぬすびとの大將は。調伏丸とて。これも袴だれが。股肱とたのめる賊なり。常人を見やりて。いひけるは。我軍中に。定めたる例にて。はじめて降参のものは。さるべき財をぬすみとり。かつ其ぬしの頭きりとりて。もてくべきおきて有り。いそぎ此ふたつの物。とりもてこよ。さらば我軍中におきて。一卒の數にくはふべし。とくいそげとて。追出しぬ。常人案にたがひながら。ことうけして。たち出ける。もとよりおめたる男なれば。此ことをきくより。いろもなくなりて。かた／＼とふるふを。ぬすびと共。をかしがりて。さのみな思ひなやみそ。かしこの松原に往て。みちゆく人をまちふせて。まづ聲をあら／＼かになして。おのれこれにあり。とゞまれといひ給へ。かならずおそれて。持たる物など皆すて。逃ていぬるものぞ。それをおひうちにせば。頭とりて歸らんこと。やすかりなん。とをしふ。さらばしおほせて後。見参に入候ひなんとて。そこを出て。をしへられつる松原に行て。松が根にしりうちかけてをる。此頃盗人のおこりたちたる時なれば。たれかはとほらん。人かげだにふつに見えず。もしむなしく歸らば。いかなるめにあはんずらん。あはれ旅人がなこよかしと。あくびうちしてをりけるに。あなたより火のかけ見ゆ。さは人こそくれ。おのれいかで。と刀に手をばかけつれど。そゝろに五體わな／＼とふるひ出て。ふみたる足だに。とゞまらぬを。念じてたゞすみあけるに。よくは見えねど。松ともせし旅人の。たけ高く見えたるが。ながき刀さして。裾をつるはぎにかゝげて。のど／＼と。あゆみてくるさま。よのつねの人とも見えず。たくましげに見ゆ。されど其まゝに見過すべきにあらねば。ひはぎこゝにありと。よばんとすれども。聲たゞず。こはくちをしとてせめてよばれども。ふつに聲出ず。いと／＼はかなげなる聲して。やおれ／＼。ぬすびとの大將軍こゝにあり。もちたるつゝみ。我もとに置いていねと。ふるひ／＼いへば。かの男ちかつき來て何事いふにか聲ひきくて。我耳へいらぬぞ。もし旅人にておはすにや。なぞ／＼といひてちかよれば。いとゞおそろしくて。舌もこはりたれど。せめて聲をあげて。おれはひはぎなり。といふ／＼。ふるひてをるを。旅人見て。なにといふ。ひはぎなりとか。さもあるべ



し。などてさはふるふぞ。といへば。おくれをみせじとて。これは武者ぶるひとて。たけき人のする事ぞといへば。旅人ほくそ笑て。おのれは。ひはぎのうひ山ぶみならん。ころしてくれんずとて。刀ひきぬきて。ふりあげたるに。膽心もうせて。のけざまに倒れて。ふたゝび起あがらず。ひたひに手をあてゝふるひつゝ。拜むを見て。蒸物にあひて腰がらみせんも。むやくなりとて。引おこして。身のまづしさのせんかたなさにぬすみするにやといへば。さん候さん候。といふ聲も。はのねだにあはず。さてはあはれの事なり。今よりひはぎのわざをやめて。入道して。命つなぎてあれとて常人がもとどりかいつかみて。刀して。ふつとおしきり。此つゝみおのれにくるゝぞ。猶同類のものもぞある。ととふに。息きれていらへすべくもあらねば。手をかきて見すれば。さては同類のものはなしとや。さるにてもおのれさばかりのかひなしにて。ぬすみして。世をわたらんと。思ひたぬるこそおろかなれ。といひつゝ。刀を鞘にをさめて。うちわらひつゝ。松とりてかしこをさしてぞ行ける。常人うしろを見送りて。たゞんとすれども腰たゞず。はひよりて松の樹にすがりてやうゝたちぬ。さてかのもらひえたる包。脊におひて。思ひけるは。人の頭をとりてこと。いひつけたれど。いかでさる物の。手に入るべき。よし。此ころ。ぬす人どものみだれ入てし。所には。かならず頭の二三は落ちりてやあらん。それひろひ取て欺くべしとて。所あるきて。見まはれば。人の死骸など。あまたあり。雲透にすかし見るに。頭ばかり。ころびてあるも見ゆ。これこそと思ひて。其まゝ包につゝみて。ひきさげて。調伏丸が陣へとはしり行ける。頃ははや明がたに成て。東の空あかくなりて。鳥などもなきつれて飛あるく。常人陣のうちに入れば。ぬす人ども見て。親がたのとく起出給へりといふ。そこにためらひてをるほど。ゆゝしげなる男の。鎧わきばさみて。奥より出きたるを。何ぞとへば。あれはそこのことく。よべ降参したるが。ゆゝしき高名して。よきたからに頭へて持きたれば。ひきて物に鎧給りたるなり。といふ。さてはしすましぬ。われも鎧一領のぬしに成て。ほこらばや。と思ひてをるに。今まありこなたへといふ聲す。いそぎ入て見れば。調伏丸。鋪草のう

へにねまりゐて。いかに得ものはありつるかといふ。さん候。よべ仰せを承りて。かしこの松原へ行て候ひしに。うしふたつ計とおぼゆるころほひ。ひたゝれに。はら巻したるもの四人。いかめしげに松ふりて。とほりて候を。聲をかけて候へば。彼等たちとまりて。弓矢つがひて。まつ先なる男の。たかやかによばゝり候は。われゝを誰とか思ふ。清和天皇の御うまご。六孫王經基の君より。三代にあたりて日本無双の名將とよび奉る攝津守源の頼光朝臣のみうちに。四天王とよばれる。渡邊の源二綱といふを。傍なる盗人うちけして。源二綱は。内裏の守護とて。夜行けいめにいとまなければ。此あたりへ來べきにあらずといへば。常人。物をきゝはてずして。咎め給ふことやはある。その綱が叔母の家にありて。菜つみ水くみ飯かしく。一騎當千の中間男に。茨木辛人といふ者なり。征矢ひとすぢまゐらせん。とよばゝる。夜めには。しかと見へ候はねど。たしかに重藤の弓に。きりふの矢つがひたると覺え候。さてきりゝと。ひきしぼり。ひようふつと射たる矢を。某刀にて。打おとし。は武者にむかひて。名のるに及ばず。太刀のきれあぢ。うけてみよと。まつかうにかざし。打てかゝる。敵もぬきつれ。きりむすびけるが。かばろふいなづま水の月。こゝにあらはれ。かしこにかくれ。飛鳥のごとく。かけめぐりて。ていたく働き候へば。かなはじとや思ひけん。いちあし出して逃ゆくを。まさなう候。辛人どの。返しあはせて。勝負あれと。あとめについで。追かけつれば。さすがに恥をや思ひけん。とつて返して。打てかゝるを。やり過して。てうどきる。灸所にやあたりけんよろめく所を。のつかゝり。首かき切て候なり。されども三人のやつばらを。うちもらし候事。くちをしくこそ候へと。さもまことしやかに。うちかたりて。これは奪ひたる品にて候とて。二の包調伏丸がまへにさし出せば。調伏丸かしらを包たる。むすびめ引とき。打みて。にたゝとわらひて。やおれものども。こやつ。引くゝりて。拷器につなげといへば。ばらゝとよりきて。御談であるぞとて。常人をくゝりあげつ。こはいかにさるべき賞をば給はらで。などかくはし給ふぞといへば。調伏丸うちゑみて。無慙のしれものかな。これ渡邊が士卒の頭なりや。と



いひて。足にて常人がまへに。蹴やるを。よく見れば。女の頭なり。さては。夜目に見たがへて。あらぬ頭をとりて。きたれるよとおもへば。きえもいるべきこゝちして。面あかくなして。口ごもれば。調伏丸。かさねて。おのれがうばひきたれる物。よくみてあれとて。包ひき明てなげ出すを。うち見れば。頭なき人の軀なり。見るより膽つぶれて。例のわなゝきふるひ出す。金剛二郎きたれとよべば。むといらへて出る人あり。見てあれば。よべ出あひたる旅人なり。金剛二郎うちゑみつゝ。いかに。おれを忘れたるか。これおのれがくれたる物ぞとて。なげ出したるは。その時きられし。我もとゞりなり。常人魂うせて。生たるこゝちせず。おのれが剛臆を。はかりみんとて。かくかまへたれど。かばかり臆病づきたるやつとはおもはざりしとて。一度にはとわらふ。調伏丸いひけるは。こやつ。いたくのかひなしながら。降を乞てきたりたる。こゝろざしのあはれなれば。とゞめ置て。板風呂の水などくますべし。但味方に入たるしるしなれば。例の如くはからへといひて。あなたへ入ぬ。盗人ども。常人が腕をまくりて。針のさきしへつきたれば。よそに行て。人まじらひすべきにあらず。と思ひて。夫より日ごとに。ふろの水など汲て。あさましきわざして。いとなみをりけるとぞ。

○いもかしら

それより常人は。ぬすびとが陣にをりて。湯をたきて。日を過しるけるに。金剛二郎といふ者。いかなる事にか。常人を。かはゆがりて。おのが一騎にて。ぬすみしに出るをりくは。必俱に具してあるきけり。金剛ある時云けるは。此あたりの民どもの財は。おほかたのこりなくとりつくしつ。今よりいづくへ行て。盗せましといへば。常人いひけるは。我叔父なる。橋安世といふ者。伊賀の國なる。めのとの家に。落ゆき候と承りぬ。かれもとより家

富たる者にて候ひつれば。よきたからなど。今にたくはへもちて候はん。又かのめのとが家も。ゆたかなるよし。かねて聞及びて候。かしこへゆかせ給はなん。おのれも其所をよく存候はざれど。かしこに至りて。ひるのほど。尋ねありき候は。しりえざる事候はまじくや。といへば。金剛聞てそれしかるべし。いざいざかしこえたちこえて。いみじき所得してんとて。例のごとく。常人を具して出行けり。其夜亥過る頃。ある一村に至りけるに。大なる門たちて。かたはらには。竹の藪垣しこめたる家あり金剛云けるは。財ありげなる家なり。入て見んとて。見まはしたれば。前に一丈ばかりの。堀ありて。橋引てあれば。渡るべきやうなし。金剛ふところより。釣のやうなる物に。ながく綱つきたるをとり出で。かの竹のうへに投あぐれば。竹のうらに。鉤はからみつきぬ。金剛もちたる綱をひきよすれば。竹はうつぶしに。しなひなびくを。たぐりよせて。竹のうらを手ひかへて。これにとりつきて入れよといふ。常人いふまゝに。竹のうらにとりつきければ。金剛さはとて。手をはなつ。ふとく大なる竹にてありければ。ゆさゆさとうごきて。俄にあなたさまに起かへりぬ。常人めくるめきて。藪垣の中へ。ほうど落入りぬ。金剛又綱をなげて。竹のうらを引きよせ。これにすがりて。門のうちへ入ぬ。さて竹藪の中に入て見るに。常人は。なえいゝくたゝと成て。うちたふれて。息をもせずをり。つらに水吹かけなどして。引出しければ。やういゝ人こゝちつきぬ。我にしたがひて來れ。ゆめ聲なたてそとて。さきに立て。母屋とおほしき所にいたりて。何事するにか。しばしきぐり。物すれば。よくかためたとぞし。やすらかにあきぬ。おのれはこゝに待てをれとて。常人をばすのこに置て。たゞ一人奥をさして入ぬ。しばし有て。大きな皮籠を持出て。常人がかたはらに置て。又奥へ入て。此たびは。酒肴など持來りて。すのこのうへに。丈六かきて。常人にものみくはせ。さて革籠を。常人におはせて。堀には板をわたし置つれば。こゝろやすしとて。又先に立あゆみ行て。門おしひらかんとするに。錠さしてあり。金剛こしなるかなつゝととりて。ちたゝく。此音にめさまして。門のかたへなる家の翁おき出で。窓より覗みれば。あやしきものゝ。皮籠かたげて出る



なり。盗人にこそとおもひて。拍子木とりてうちたつれば。奥のかたにても。これにあはせて。拍子木うちたてゝさわぐ。金剛門の戸おしあけて。しそんじつ。とく逃よとて。鳥のとぶやうにはしり出て行ぬ。常人はおもき草籠は負つ。不案内ではあり。板橋かけたる所は。いづくなるかとすかし見れど。如法闇夜のことなりければ。あやめもわかず。心はせかれて足も定まらず。たおしくとして。堀の中へずぶりとおち入ぬ。家の内には。數十人の若ものども。走り出で松うちふりてのしりけるが。はしりきてぬすびとは堀に落ちたり。引出せとて。くまでなどてんに持きたりて。ゑい聲を出して引あげつ。やがてひきくりに。はひりに立たる柳の樹にしばりつけつ。さは一定ころされぬべし。さてもせんなきぬすびとにくみして。うきめみる事よ。と後悔して。おめくとなりてゐたるに。あるじとおぼしき翁いできて。つくく見。こやつ。ぬすびとはおめたるやつなり。かはごをとりかへせしうへは。はなちておひやれといへば。若ものども。いかでぬすびとを。とらへて。たすくべき道理候はん。夜あけばふしづけとなして。底ふかき川にしづめてんなどいふ。いよ／＼心よわりて。頭うなだれてあるに。番せるをのこども。俄に。そや。などささやきて。隣うちなほし。うつぶしてをれば。あなたにしはぶきの聲して。のどかにあゆみくる人あり。男どもみな頭もたげずをれば常人おもひけるは。これは此所のをさなどにや。我を殺しきたるなるべし。とわな／＼とふるひてをるに。此人まぢかく來りて。紙燭とりてつく／＼とうち守り見るを。目もあはせず。うつむきゐるに。此人聲をあげて。おのれは常人にてはあらぬかといふ。驚て見あげたれば。叔父なりける橋の安世なり。あざみ。かつよろこびて。聲あげて。たすけ給へ／＼といふ。安世にが／＼しきけしきして云けるは。おのれたづきなさまに。盜賊にくみしけるなるべし。とし頃うしろめたきものに。思ひたりしに。我まなこに違はざりけりといへば。あるじの翁走りきて。さては。甥のとのにて。おはしけるにや。しりまゐらせぬ事とて。むらいをいたし候とて。いそぎ繩とかせて。泥にまみれし衣。きせかへなどするを。安世制して。さなし給ひそ。かれめは。うまれつき不當のやつなり。

いけおくべき者にあらず。いかにおのれ。思ひしりたりやと云てにらむ。安世が妻もきしりて。まどひきて。ひたすら安世を。なだめて。ともなひて入ぬ。あるじの翁常人をいざなひて。庇につれゆき。飯などくはせ。湯ひかせなどして。さまざまとあつかふ。安世ふたゝび。常人を呼すゑていひけるは。おのれいけおくべきならねど。人々のさまさまといさめ物し給へば。しばし我いかりをのどめて。ながく勘當して。おひはなちやるなり。今より心をはげまし。行ひあらため。人なみに成たらんには。ふたゝび對面する期も有ぬべし。さらば叔姪のちなみも。けふをかぎりと思へ。といひすて。障子引たてゝ入ぬ。翁常人にむかひて。叔父君のはらだゝせ給へること道理あり。此後心あらため給て。御勘當ゆりんやうに。はからひ給へと。さまざまといひきかす。常人は。べし口してあたりけるが。暫ありて。頭をあげて。人々のおぼさん所。面目もなく覺え候。けふ迄あらぬ事ども。仕りつれど。叔父君の御いかり。人のいさめを承りて。まことに夢のさめつることちして候。此後ぬすびとのまぢらひをたち候て。一向に心をはげまし。行ひをあらため候はんず。といふ。さては本心になり給へるならん。うれしき事なりなど。翁もよろこびて。そごろに涙ぐむ。安世が妻。袋につゝみたるこがね持出て。常人が前にすゑおきて。これをもて。世のたづきすべき料となしたまへ。しらせ給ふごとく。むすめ菌生も。いまにゆきかたしれず。さだめてぬすびと共の中に。とらへられて有なるべし。御身こがねもて。かれをつくのひ出し。ふたゝびつれ來り給はば。安世どのゝよろこびはさらなり。たれ／＼もうれしき事。これにましたることもあらじ。さては御身の勘當も。ゆるさせ給ふべき事。あきらかななり。ぬすびと共ほろびうせなば。一家うちそろひて。ふたゝびめてたく。本の近江に。歸りすむべし。たから共は。穴をうがちて入置たれば。よもぬす人どもの。さとりしるべき道理あらじ。とにかく御身の行ひによりて。ゆくすゑもやすかりぬべし。といへば。翁も。よくこそ思ひより給ひたれ。菌生の君の御うへ。しおほせたまひて。あておはさば。翁とりもちて。御かうじは。ゆるさせ給はんやうにはからふべし。といへば。常人うなづきて。とにもかくにも。叔父



君の御まへ。よきにつくろひ給はるべし。蘭生どのの事は。命にかけて。とりかへし参るべしとて。こがね取て。ふところにおし入。明はなれなば。人もぞ見る。御いとま給はりなんと。立あがりて出て行けり。道すがらおもひけるは。此こがね百兩ばかりもあるべし。いかで蘭生を尋ねいだし。あがなひえて。我妻となし。のこりのこがねをもて。あづまの方へくだらばやなど。又も横ざまなる。心をおこして。ひとりゑみしてあゆみける。凡道のほど。二里あまりきたりぬとおもふに。しげりたる森の中にて。常人を々とよぶ聲す。入てみれば。金剛二郎。かのかはこを。かたはらに置て。打やすみてをり。たがひに無事をよろこびて。扱いかで此皮籠。ふたび取もちて來給ひしといへば。汝をくくりて責さいなむ間。皮籠は庭のかたへにありしを。まぎれ入て。ぬすみつるなり。かばかりふるまはざれば。よきぬすびとはいひがたし。といふに。身の毛さへたちて。おそろしかりける。さて皮籠のふた。ひらきて見るに。いみじき鎧一領。ほかにさまぐの財物も。多く入れてあり。常人いひけるは。この鎧は。我叔父の。先祖よりつたへたる物とて。ことに大事にせる物なり。よきたからをとりえ給へりといふ。それより皮籠をば。常人に負はせ。そこを出て四五町あゆみ行けるに。金剛ふりかへりて。常人をつくぐと見て。おのれがふところの。おもげに見ゆるぞ。こがねもちて。きたるにやといふ。いかでさやうの物もちて候はん。からうじて。命ひとつひろひて歸り候物を。といへば。金剛まなこを大きになして。おのれ金剛ほどのものを。たばかりいつはらんとするや。人のふところ。物のありなしをさとりしらで。ぬすびとのなりはひいできなんや。とく出して見せよといふ。しぶくふところをさぐりて。こがねつゝみたる袋とり出て。はじめをはりを。語り聞せけれど。耳にもいれて。こぶしもて。常人がしやつらを。つよくうちて。おのれわれにかくさうとする。こゝろざしにくければ。此こがねおのれにはやらぬぞとて。おのがふところへおしいれ。さらばとくあゆめと。道をいそぎてはしり行ける。扱陣につきて。常人心におもひけるは。ぬすびといふ物は。きよしにまさりて。おそろしき物なりわれにしたゝかからきめ見せて。たから

はおのれひとりしてとりつ。かゝる所に長みせんはむやく也。神崎には。數のたからども。埋め置たりと。叔母なる人かたられき。かしこに行て。掘出してのこりなく。我物にせばや。但けふ皮籠に入て奪ひきし。叔父人の鎧は。なみなみの物にはあらじ。かれぬすみて。出てゆかばやと思ひて。心をくばりてみけるに。金剛はさらに心つかず。調伏丸がもとに行て。夜ふくる迄。酒のみみて歸りこず。よきひまぞと思ひて。小ぬすびとらが。眠りをを。さいはひに。皮籠打ひらき。鎧とり出し。包に入て背に負ひて。跡をも見ずしてはしり行ける。凡三里ばかりきたりけるが。息きれて。術なければ。しばし。いこはんとて。そこら見まはせば。麥などつみ置たるあせぐらあり。戸ざしもなければ。引明て。おくの方に入て。ねはらばひてみたり。子の刻計にやと思ふ頃。おもてに人のあしおとすなり。われを追きたるにやと。かた陰のくらきかたにそひて。覗きみたるに。さはなくて。男女手ひきあひて入來り。これは此あたりにする山賤の子の。親などのめを忍びて。ひそかにかたらはんとて。つれだちて來るなりけり。入くちの方は星あかりにて。いさゝかあざやかなり。常人めをつけて見れば。我にはおとりたる。みにくき男の。みじかき衣きてをり。女もむくつけく。ひらめなる顔にみゆ。何にかあらん。くゞつに盛たる物。互にうちくひて。女あいだれたる聲して。わぬしは。我を思はじなどいへば。男。あな冥加鐘守の神をかけてかはりはせじ。松山に渡うちて。ほら貝の。天上するとも。わぬしをおきて。外心つかはんや。これ見給へ。わぬしのでづから織ておこしつる布をば。ふんどしとなして。身をばはなさず。かきてをりなどいふ。常人をかしさ念じて聞あけるが。われも物のほしかりければやをらはひよりて。かれがもち來るくゞつのはしを。およびて。引よせて見れば。いもがしらをゆてゝもてきたるなりけり。男も女も。かたみに物いひかはして。口びるひらかしをれば。これをしらす。常人が。いもくらふおとの。高く聞えければ。男心づきて。此家には。鼠あんなりといふ。常人ねずなきをして見すれば。さは鼠なり。もてきたる物。かれにとられなんとて。手をやりてさぐり見るに。なかりければ。いもがしらは。いかにしつるぞ。さて



はわぬしはやう。くひつくしけるにこそといふ。女いかゞは。籠に入れて。數二十ゆて。もてきつるなり。おのれた七喰たりといふ。男われは三こそくひたれ。さては十ばかり。鼠のもていけるならし。くゞつをさへ。もていたるは。なみくの鼠にはあらじといふ。さて二人ともに。帶ときて。あかはだかになる時。わきくそにや。あやしき匂ひの。そこらたちわたりて。顔にふきつくるやうなれば。常人たまらず。あなくさといへば。女も男もおどろきて。あゆるし給へといひつゝ。脱たる衣とりて。逃出るものか。ころびたふれて。あやしき音をさへ。あとのかたにて。たかくならしつゝ。足をそらになしてぞ。はしり出行ける。常人おもはず。聲うちあげ。わらひて。さて鑑かきいだきて。神崎をさしてぞいそぎける。かしこに至りて見るに。さいはひに家はもとのまゝにて。立てあり。心あてに。堀うがちて見れば。案のごとく。財どもあまたあり。それよりくづれたる所など。修理し。つくるひて。おのれ家あるじと成て。すまひけり。さるにても。伊賀の國なる。安世が歸り來らば。むづかしかりぬべければ。いかにもして。安世をうしなはゞや。と思ひて。あぶれものを。かたらひて。伊賀の國へつかはしけるに。安世は妻をのこして。いつかたへか出行ける。と聞て。歸り來て。そのよしを告げれば。常人おもひけるは。今かく盜賊どもはびこりたる世に。安世いかに武術に。練じたればとて。まさにやすく。通ゆきなんや。さだめて。盜人にころされぬべし。これは我ために。いみじきさいはひなりとて。ひとりよろこびてぞ。くらしむたりける。

近江縣物語卷之三終

近江縣物語卷之四

○ふくろのうば

こゝに多衰丸といふ盜人は。鏡山のあたりに。陣屋をまうけ。めぐりには。釘ぬきしわたし。堅固にかためてぞ守りゐたりける。此陣にては。擄とせる女ばらを。ひとつにこめ置て。身のしろを出さん者には。賣わたしやるべきさだめなりけり。されどぬすびとのすめるあたりは。おそろしがりて。人もよりこざりければ。やす川のほとりに。かりの小屋つくりて。ぬすびとら。常さまのあき人のごとく出たちて。かのとらへつる女ばらを。こゝにてうりひさぎける。小屋のまへに。札をたてゝ。かきつけおきけるは。このたびゆくへなくなり給ひし。うばむすめたち。いとほしき事におぼえ候へば。おのれ。親がたの人々より。こひうけて。たまはりて。やしなひ置て候。ほしとおぼさん人々は。身のしろの錢もてきて。つくのひ給へ。すなはち返しわたしまゐらすべし。あふみの國のあきびと某とかきて。札たてたりければ。老若男女つどひきて。おのく錢いだして。妻子をひきつれてぞ歸りける。およそ三日ばかりのほどに。やす川にて。賣いだしつる女ばら。六百ばかり。おほかた皆賣つくしけるとぞ聞えし。しかるに。いづかたよりも。さして買はんといふ事なき女。四五人ぞ残りける。多衰丸いひけるは。此女ばら。ながく養ひ置なば。おほくの米をくらひ費しなん。さりとて。うちすてゝんには。軍令を破るに似たり。いかにせばよからんといへば。一人のぬすびと云けるは。かゝる者。たれかは錢にかへて。引つれ歸り候べき。それがし只今思ひより候は。兵糧をたくはへ候袋どもの。むなしきがあまた候。その中へ。かの女ばらを。一人づゝうちこめおき。顔かたちを見せず。賣わたし候はんはいかに。といへば。げにいはれたり。さらんには。美惡の沙汰に及ばず。買とりてゆく



べければ。明日より此おきてに。定むべしとぞ。議定しける。こゝに梅丸は。都をはなれて。石山のあたりに來りけるが。ぬす人どもの。女ばらをひさきうるよしを聞て。蘭生も。もし其中にありもやせんと。西念法師をば。宿りとどめて。たゞ一人やす川をさしてぞ來ける。釘ぬきの中に入れて見るに。吾よりさきに來りて。買もとめんといふ者二人。うづくまりをり。めをつけて見れば。一人は常人なり。かれ一定蘭生を。買とらんとして。來れるなるべし。もし彼にみてゆかれなば。ほいなからん。いかにもして我引つれてかへらばや。と思ひみけるに。常人も又梅丸を見つけて。彼なみの望有て。女をかはんとするにやと。不審く思ひけり。されど。たがひにしらずがほつくりて。詞をだにまじへず。はるかにひきへだてゝ坐しむたり。しかるに。奥さまより。大きな袋を荷ひ出で。ならべ置つ。心えぬ事かなと。守りをれば。あき人に似せたる。ぬすびと云けるは。賣わたさんしろものは。かう袋の中にこめて置たり。各めにつきたらんを。引とりてゆくべしといふ。常人も梅丸も。おなじ心に思ひけるは。袋の中にこめて置たらずは。もとめ歸りても詮なからん。さりとて。買えざれば。ふたゝび逢見ん。てがゝりもあらじ。もしすくせの契り浅からずば。買とりたる袋の中に。蘭生がをらんもしるべからず。とにかくにまづ。もとめて見んと思ひて。價をとへば。きのふ迄は。人々のえらびにまかせて。ひさぎたれば。價もたふとかりしなり。けふは袋の中にこめ置つれば。價に甲乙のけぢめなく。各袋ひとつにて。錢十貫文に賣わたすなりといふ。常人が傍にゐたる男ついたちて。おのれ此かななる袋をかひとらんとて。錢を出して。さて袋の口をもろてにさゝげて。こなたなる方にもてきて。むすびめときて引出す。中より出たる人をみれば。はたちばかりの女の。目はかなまりのやうに光りて。口は耳もとまでひろがりて。上下の齒は。水せく杭の如く。色はさながら。くろがねをのべたるがごとし。昔僧伽多を追かけ來たりし。羅刹女といふ物も。かゝりけんと思はる。はひ出るよりかの男に向ひて。わ君われを買とりて給へるとや。おのれは丹波の國の山かげにおひ出し。狩人の娘にて候。おもひかけず。かう賣わたされて。所々へめぐら

ひて。過し春の頃は。四條のかはらに。三十日ばかりありて。鬼をんなとよばれし者ぞかし。我を妻とし給はゞ。所々あるき給へ。見る人ごとに。錢をなげあたふれば。けふのいとなみにたりぬべし。といひつゝ。手を取りて。よりそひたるかほつき。さながら鬼々しく。うたてげなり。男は見るより。あなたをむきて。ふるひて有けるが。我大君の國にしもかゝる物の住て候かな。これはふようなる物なれば。たまはらて歸り候ひなんといへば。はら巻したる男。おくよりいできて。買えたる女を。すて置いていなんものをば。頸をきれと。親がたの仰せなり。おのれみてゆかぬにや。とのゝしる。女いとゞあまえて。男が手を取りて。外面は。夜叉なれども。内心は菩薩ぞかし。いざ人めなき所に行て思ふことかたらはゞやと。ふるふ男の手を取りて。おのれが袖にかいくゝみて。驚のごとき足どりして。引たてゝぞ。出て行ける。梅丸は。のこりたる袋に。めをつけて。守りみけるが。左なる袋は。はしたなく。うごめきはたらきて。さわがしければ。よも蘭生にてはあらざるべし。右なるはのどかに。靜まりて見ゆれば。もし尋ぬる人にもや。と思ひて。この袋。おのれ買とり候ひてん。といへば。はら巻せる男。價をあらため。受け取て。とく袋をあけて出せといふ。梅丸あはれ蘭生にてあれかしと。心のうちに。念願して。袋の口をひらきてみれば。蘭生には似もつかざる。とし六十にあまりて。髪は白かねの針をうゑたるごとし。老くちぬる軀にてぞ有ける。梅丸あまりのことに。詞も出ず。尻居にどうと坐してあきれむたり。軀うちしほれたる顔もてあげて。わ君こゝろをくるしめ給ふな。われも親族の人あれば。日をへずして。迎へにきたりなん。さる時は。けふのみのしろ。一倍となしてむくひまみらせん。といへど。梅丸は耳にも入れず。さてしなしたり／＼といひて。大息つきてをり。常人はるかに見やりて。したりがほにゑみわらひて。ふところより錢十貫とり出で。投出し。かたへの袋のもとに。よりて我戀人とく出給へ。といひて。袋の口をあけんとするに。まだ出もやらで大きな聲して。けら／＼とうちわらひて。手うちたゝきて。をどり出るよりはやく。常人にいだきつきつ。常人おどろきて見れば。さだ過たる女の。たけ高く



やせたるが。まなこすゞどく。そこらうち見まはしつゝ。我をたれと思ふ。あやめの郡の大領がまなむすめ。おとむすめ。おのがよみ歌は。いにしへのそとほり姫の流ぞ。よみ置たるおもて歌は。それよ〜。梅がえにこつたひてなくほとよぎす。聲きく時ぞ秋はかなしき。いかによかんめり〜といひつゝ。常人が顔を見て。これがわが男なりとや。あたら男の。いろくろく。疱瘡のあとさへおほかり。佛つくるあかにたらずば。此あその鼻のうへやほらまし。といひさして。うつぶしふして。よ〜となきいだす。常人。こやつ物くるひにこそと。逃出んとするを。ぬすびとら引とらへて。女をすてゆかん者は。頭うちおとす定めぞと。刀に手をかけて。ひし〜とす。常人せんかたなく。しぶ〜に。女が手をとれば。さる見にくき人を。夫とすべきやと。頭ふりて引もどす。常人も。もてあつかふを見て。ぬす人ら。繩をもちきたりて。女を常人に負はせて。繩もてくる〜とくりつけて。さは足のむきたらんかたへ。いねとて。つきはなす。常人は。梅丸がおもはん所も恥かしく。面目なげに。よろ〜と立あがれば。女はやりかに。聲うちあげて。いせ物語の繪にこそ。かゝる姿をばかきたれ。それにはひきたがへてけふの在原のあそんこそ。こよなう鼻ひきくおはすなれ。といふ。常人ひ。出る斗。顔あかくなして。物ないひそと。女が足をつみつゝ。うちおひて出て行。ありとあるぬすびととも。みな手うちたゞきてわらひあへりけり。梅丸もせんかたなくて。姫が手を取て。宿りへぞ歸りける。かしこには。西念待つて。門に立て居たりけるに。おもひよらず。梅丸老たる姫をつれて。歸りきければ。驚ていかなることぞとふ。梅丸しか〜の物語して。先姫にゆふげなどしたゝめさせ。よくいたはりてさていかなる人ぞ。氏はいかに。名は何とのたまふとへば。姫かゝる身となりて。名のり聞えんも。なかなかに恥かしくおほえ候。もとよりすぢめなき。しづの家におひたちて候へば。氏も何と申やらん。しり候はずといふ。さるにても。御名をば。なのり給へといへば。姫しばしうち案じて。ぬすびとらが。袋に入れ置候へば。我名をば。今より。袋とめされ給へかといふ。西念こは興ある御名なりとて。その夜より姫をさして。袋こそとぞよび

ける。かうかりそめによびつけたる名の。後々世中におしうつりて。老女をあがめて。御袋と呼ならへるは。此時ぞ始なりける。その夜はうちやすみて。夜あけて。梅丸ひそかに。西念に云けるは。かゝる不用な姫をつれ來りて。いかにともせんかたなし。但よそ人のこゝろなき者は。ぬすびとに。欺れしをほらだちて。怒りを此姫がみのうへにうつして。うち罵さいなみなどもすべかんめり。それはいとあるまじきこと也。欺きたるは。ぬすびとがたくみにて。姫が身にあづかれる事にあらねば。いかで聊かれを怨むべきや。たゞしかの姫いたく年老てあれば。奴婢のごとくあしらはんも。心ぐるし。いかにせましといへば。西念かゝる旅の空にて。老姫一人。かしづきなんこと。便なくは候へども。縫物洗物など。あつかはせんには。一段のことに候へば。留め置給ひて然るべくやといふ。梅丸ふたゝび思ひめぐらして云けるは。我親とたのみつる。左衛門殿は。今やもめにて。おはしませば。此姫をまゐらせて。御そばづかへとなし奉らん。御としも。かの姫とは。似あはしくおはしませば。老人の御なぐさめともなりなんといへば。西念がいへるば。かの姫。老たりといへど。うちつけに。婚姻めきたる事など。物語し給はゞ。俄なることに。うけひかざる事も候べくといふ。梅丸。さかし先左衛門殿の御うへはつゝみて。姫にかたらひて見んとて。姫をちかづけていひけるは。御身年ふけぬる人なるを。若輩なるわれらが。なめげに呼たてん事。心ぐるし。御身はいかにおぼすにや。といへば。姫などてさはの給。姫は心のゆかたけ。みやづかへつかうまつりて。飯をもちしき。水をもくみ候べし。下女とおぼして。つかはせ給へといふに。梅丸頭ふりて。我にくらぶれば。おとどのとは。一倍にやなり給らん。親子といひても。にげなからず。おのれ幼き時より。母に別れて。たのみまゐらす人もなければ。今より御身を仰ぎて。我母人となして。つかへ奉らんと思ふなり。いかにゆるし給ひてんやといへば。姫驚きたる顔に。ゑみをふくみて。手をあはせて。さても思ひかけぬ事をの給ふ物かなとて。涙をながす。梅丸これ戯れごとにはあらず。今日より母人と呼奉らんとて。手をとりにて。座を譲り。頭をさげて。禮をなしければ。姫あなかつたじ



けなや。いかでとどむれど。梅丸うつぶしふしてたゞず。痴心におもひけるは。あめのしたに。かくなさけある人こそおほしけれ。そもいかなるわざして。此人の恩にむくはましと思ひめぐらしけるが。ふところづきけるは。我盗人のもとに。とらはれとなりし時。そらやまひつくれる。うつくしき人のありし。かれをもとめて。此人の妻となしなば。聊恩をむくゆるに。たりぬべくやと思ひて。梅丸にむかひて。わ君は御妻もたせ給ふにや。ととへば。梅丸いまだ定まれるよすかなし。といらふ。痴さらばかしこに。いみじき美人の候。こがねにかへて。あて來り給ひて。御妻となさせ給はなんといふ。梅丸さる美人いづくに。候ととへば。痴此美人。かたち計には候はず。こゝろざしもうるはしく。およそ此やまとの國に。又ふたりとなき烈女にておはす。とくやす川に行給ひて。あがなひて來り給へ。もし明日にいたらば。よそ人の手に入らん。其時くゆとも。かひなからんといふに。梅丸ぬすびとにとらはれて。さえをあらはし。みさを守りしとは。いかなることぞ。語り給へといへば。痴事のしさい。おほかた語りて。ぬす人らがもにて。かの美人と。ねんごろにかたらししことをいへば。梅丸また云けるは。たとひさやうの人ありとも。袋の中にこめあれば。いづれを其人とさして買とらん。又もあやまりて。こと人をたづさへ來らば。人わらへなる事ならんといへば。痴それにこそ。目じるし候へ。かの美人。常に尺ばかりなる物を。大事として。腰のあたりにさして。おはせば。よくさぐりて見給はんには。おのづから誤ること候はじといふに。梅丸驚て。何とのたまふ。かの女は。腰に尺計の物さしてをりとや。さらば我心にも。思ひあたれる事候へば。たゞ是よりやす川へ行て。買とりてまかりなん。とせきたつさまに。西念おのれも御供仕りてん。ふくろこそには。ひるねして待給へ。ともどもそゝぎさわぎて。すそひきからげ。やす川をさしてぞ。いそぎける。さてかしこに至りて。釘ぬきの外に西念をまたせ置。梅丸ひとり入て見れば。旅人二人ならびて。女をかはんといふ也。ぬすびとらひとつの袋を荷なひ出で。しろものはうりつくしつ。けふはたゞ此袋たゞひとつあり。しかるに。三人の買人あり。此袋三にきりて。うらまし

やといひてわらへば。一人の男すゝみ出で。おのれは最初に門を入候へば。おのれに賣わたし給ひてんといふ。今ひとりの男。かれが十貫文にかはんとならば。おのれは十五貫にかふべければ。おのれに賣らせ給へといふ。梅丸人々のあらそふを見て。われこそ買はめと思ひけれど。先よくこゝろみんとて。袋のうしろにいたりてさぐりみれば。痴がいひしにたがはず。腰に物をさしてをれば。うれしくて。をどり出で。此袋よそ人にかはせば。おのれ二十貫にもとめ候はん。賣てたべと手をすれば。盗人うち見まはして。かしらかきて。三人の買ぬしありて。しろ物はたゞ一ツあり。いづれに賣てよからんといへば。三人とも聲をそろへて。たゞ我に賣てたべくと。かしましくいひてあらそふ。一人のぬすびと。かしらかたむけて。袋ひとつを。十貫文と定めたれば。今さらつりて。錢をましたる者にうらんも。いかゞなるべし。とにかくに木戸を先にくりたる男に賣わたしやるべきなり。といへば。かの男よろこびて。袋にゆびさして。二人に向ひて。此女人我手に入ぬ。さこそうらやましからめといふに。梅丸身をもだへて。いかで汝にわたすべき。もし我に譲りあたへずばおのれ其まゝにおかんやはとて。せきたちければ。盗人はらだちて。こやつ尾籠なり。われ／＼がまへにて。むらゐなるふるまひすなり。此ごろひさしく人をころさざれば。手のかゆきこゝちする。おのれ二つになしてくれんと。刀ひきぬきてかゝる。梅丸うなじをのべて。さわがずしてをれば。かたはらの盗人感じけるにや。刀ぬきたる手をとらへて。かれはいみじきわかものなり。ころさんはなか／＼心なしかれ。かゝる時ひたすら。かたひきていふべきならずわれにうるはしき法ありといふ。みな／＼。いかなる御おきてに候ととへば。かの男いひけるは。此袋。麻きぬをもてつくりたれば。外より内は見えざれど。内にありてすかし見れば。外はよく見えわたるなり。今汝ら三人。ならびて立て居よ。袋の中なる女にみせて。えらばせてん。たれにもあれ。えらびにあたりたる者は。此女をつれて歸るべしといへば。みな／＼これはことわりある。御おきてなり。と



三人とも。かたへにならびてたちをり。かの男聲をあげて。いかに袋の中なる女人に物聞えん。此ならびたる男どものうち。わ君が心に。かなひたらん人を。さしてをしへ給へ。といへば。袋のうちより。やさしげなる聲にて。我は右の方にたちたる。青き衣きたる人こそ。といふ聲。あてやかにうつくしげなり。梅丸きくより。我をさしていへりて。をどりたちてよろこぶを。二人の男はすさまじげなるかほして。物をもいはず。頭かきてたゞずみをり。梅丸おもひけるは。こゝにて袋をひらきて出さば此二人のもの共。いよくうらやみふづくみて。よこさまなる事などいひ出べくと心づきて。懐より銀とり出て。紙につゝみて。ぬすびとらがまへに置いていひけるは。此袋このまゝ。になはせてまかりたく存候。さるべき人ふたり。かしたびてんといへば安きことぞとて。士卒二人よび出て。汝ら此袋を昇て。かれが宿りまで。送り行べしといへば。士卒拐を。袋のむすびめにさし入れて。になひあげつ。梅丸いさみたちて。引そひてゆく。西念は。しおほせつる事軀にしらせんとて。先にたちてはしり歸りける。これやいもせの山ぐちの。わりなき中のはじめなるべき。軀は門の外に。まちつけるに。西念があへぎまどひて。かけ来るを見て。いかにやともなひ來さまへりやととへば。西念聲あげて。よめの君やがておはすなりといふ。軀あなめてた。歩行かちにてやおはすこしにてやおはすととへば。いな。ふくろにのりて。おはすと。いひさしてかたみにふきいだしてわらひあへり。程もなく。梅丸袋をになはせ入來てまづ二人の士卒に。錢とらせて返しやりて。とく袋のくちうちひらきて。しかるや。しからずや。見んとて。むすびめに手をかけて。とかんとするにあやにくにむすびめとけず。心せけば袋のまへにより來て。いかに袋の中におはします人。御身は近江國神崎里なる。安世どのの御むすめにや。ととへば。袋の中より。しかのたまふなるは梅丸の君にて。おはすやといふ聲。まさしくたがふべくもあらねば。手の舞足のふみどをおぼえず。西念よりて。むすびめをときはなちて袋をひらけば。蘭生まるび出て梅丸が袖をとらへて。うれし泣に泣しむ梅丸もげにやおきつの島になくたづの尋ければぞ。有ところをもしりまゐらせつ。とてさま／＼

いたはりて。顔うち見て。いかにおもとはかうあやしきやまひになやみ給ぞととへば。蘭生。かゝるにつけても聞え奉るべきこと候と云つゝ。かたはらなる軀をみつめて。おどろきていかでおとどは。こゝにきておはせしととふ。軀こたへてわらはは。おもとよりさきにこゝにまゐりて候。さてもかう思はずなる所にて。あひまゐらすも。すぐせの縁とこそおぼえ候へ。さてまづふしぎにおぼえ候は。おもとは。あるじの君には。はじめて見參に入給へるなるを。いかでなれ／＼しくふるまひ給ふにか。ととへば。蘭生。梅丸をゆびさして。さきにおとどに物語して。わかれにし夫と聞えつるは。此君にておはすなり。といへば軀手をうちて。われはこゝろもなく御うへを語り出たりけるを。なか／＼にまことの契りおはしける。御なからひにこそ有けれ。まことは我を母とうやまひ給ふ事。うれしければそのむくいせんばかりにおもとの節義をそむかせまゐらせ。こゝによびむかへてんとはからひしは。やすからぬ罪なりと。かたへはこゝろぐるしくおもひてこそ候ひしかくまことの夫君にめぐりあひ給ひしは。おもとのみさをのたゞしきを神佛の感じ給ひて。ためしなき縁を。ふたゝびむすび給へるべしと語れば。蘭生さては親子の契りなし給へりとや。さらば我のために。姑の君にてこそおはせと。居なほりて。軀を拜す。梅丸がいへるは。このたびの事。母人のをしへ給はずば。いかで夫婦ふたゝび相逢ことあらん。これひとへに母の御めぐみなり。と頭をさげていへば。軀。人々のしかのたまふうへは。いまよりのち。われ母じろとなのりてん。いかに夫婦の人々。ざりとて。いたくうやまひ給ふなといへば。夫婦いよく頭をさげて拜しけり。蘭生。こしなる包取出て。これはわ君よりしるしにとて給へりしを。しばしも身をはなたず。もちてこそ候しか。今はあだなれ。とおぼえし時も候ひつれど。ふたゝびめぐりあひまゐらすまではと。ぬすびとらが。めをさへ忍びて。かくしもちて候ひつ。とて梅丸に見すれば。軀蘭生が賊營にありて。巴豆を用ひて。病婦といつはりし次第など。くはしく語つゞくるを聞て。梅丸西念も感じあへりけり。さて父君は。いづくにおはすととへば。蘭生。さるさわぎにまぎれて。逃出給ひつれば。御ゆくへは



しりまゐらせず。されどしるべあれば。もし伊賀の國にや。すませ給ふらん。あが君。とく父君に尋ねあひ給ひて。ぬすびと共たひらぎなば。ふたゝびもとの家に歸り給ひ。父のあとをつがせ給へかしといへば。梅丸。いな。それがしは別に父とたのみ奉れる人ありて。かしの家を繼べければ。安世どのの家相續せんことは。思ひもよらずといふ。これを聞て。姫よと泣出して。いきがひなきは。我身にこそあれ。かくさまに老ゆく迄。子といふものゝあらざれば。常に夫とかたらひて。さるべき人を養子となし。いかで家をもつがせばやと思ひてありしに。養子のことはさて置て。ぬすびとのために。家をも財をも。おしかすめられ。かつとりことさへ成て。よるべなく成はてしは。又たくひなきうき身にこそ。わ君たち夫婦よりあひて。語り給ふをきくにも。あはれなる身は。おきどころなきこゝちし候とて。さくりもよとなけば。梅丸いさめて。某かくて候うへは。子なしとな思ひ給ひそ。遠からずして。御親族の人々にも。あはせまゐらすべし。こゝろづよくおぼされよ。さるにても今は名のり給へ。といへば。姫なかなかに。昔語りせんも。はぢかややかしく候へば。又こそついであらば聞えぬ。さきにも申せしごとく。氏もなき田夫の妻なりと。おぼせしかしといふに。子細こそあらめとて。あながちにも問はずしてやみぬ。その夜。姫いひけるは。けふ吉日なれば。婚姻のさかづきし給へといへば。梅丸かしらうちふりて。此事いまだ父にしらせ聞えざれば。わたくしに。とり行ふべからず。ことに對面せて別れ奉りし。母人のなくなり給ひて。いくばくの月日もたゞざれば。さることは思ひもより候はず。蘭生どのを。あがなひ出せしは。師なる人の恩にむくゆるためにて。我情慾のこころにては候はずといふに。人々ますく感入ぬ。さて姫と蘭生を。ひとつ所にふさしめ。梅丸西念は。屏風へだてて臥ける。かくいふは彌生の末なりけり。此家は。まづしき山がつのすみかにて。主は京にさしたる用ありとて。梅丸にあとを預てあからさまにかしこに行たれば。外に人もなし。かゝる草ぶきの。あれたる宿ながら。夜あけぬれば。春とて鶯などの。庭にきて。はなやかになくめり。人々は。此ごろのつかれに。こうじたれば。あさいして起も

出ず。蘭生はうれしさのあまりに。えねもやらでありければ。とく起て。やりど明て。あさきの柱に。脊なかおしつ。あれたる庭うちながめて。竹ちかく。よどこねはせじなど。くちずさみあたるに。藪垣のそよつとなれば。ねぐらを出る鳥にやと思ひて。見やりたるに。さはなくて。あやしき男の頬かぶりしたるが。藪おしわけつゝ入來て。物をもいはず。蘭生を抱きてゆかんとす。蘭生聲をあげて。ぬすびとこそあれ。おうくんとさけば。人々驚き。起いで見るに。盗人蘭生を。こわきにはさみて走る。西念あかはだかのまゝにて。追來て。ぬすびとの腰に手をかけて。やらじと引とめつ。ぬすびと足をあげて。ほうど蹴たれば。ふぐりにあたりて。横さまに倒れぬ。梅丸刀とりて追かけしが。一町あまりおくれぬ。蘭生聲をかぎりに。ぬすびとのとりて行なり。たすけ給へくとよぶ。ぬすびとは飛ぶ斗に走りゆけば。追つくべうもあらず。危きこといへばさらなり。かゝるに向ひなる方より。あみがさきて。さよみのひたれかみしも着たる侍のどくとあゆみ來けるが。つかくとよりて。盗人が項かいつかみてうごかさず。ぬす人。いだきたる蘭生をすてゝ。ふり返りて。ぬきうちせんとかゝるを。侍。こぶしをもて。胸のあたりを突ければ。たちろきよるほひて倒れぬ。やがて刀に巻なる緒繩とりて。ひきくゝりつ。梅丸西念も。おひくかけ來りて。みとくにて。妻をとり返しつ。とて手をつき。頭をさげてよろこば。かの侍。此女はわどの妻にてあるかといふ。さにて候。きのふ賊營より。あがなひえてつれかへりて候なり。といへば。侍。扇のしりして。あみ笠もてあげてうち見て。やゝそこは梅丸にてはおはさずやといふ。いかなる御人ぞといへば。さてく久しく逢まらせじ。といひつゝあみ笠とりたる顔をみれば。師とたのみたる。橋の安世なりけり。梅丸地にひれふして。聞え奉るべき詞も候はず。とてかしくまる。蘭生は。父君にてわたらせ給ふか。なつかしうこそとて。とりつきなく。安世も涙をひとめうけて。蘭生が手を取りて。しばしためらひて。物いはず。さるにても。かしこくも賊營を。のがれ出て。梅丸にめぐりあひたる。まことにすくせの契り。あさからざりしよとてよろこぶ。梅丸。盗人を引たてんとし



て。顔を見れば。きのふやす川にて出あひし旅人なり。しさいぞあらんと。猶引たて、安世を案内して。宿りへともなひ。互に始終の物語して。しばし時をぞうつしける。安世ぬすびとに向ひて。おのれ。いかなる者にかたはられ。娘をばゐてゆかんとはせし。つゝまず語れ。いはざらんには。頸うちはなさんと。刀に手をかけてせむれば。ぬすびとしほくとなりて。何事をつゝみ候はん。おのれは常にばくちをわざとして。世をいとなみ候所。神崎なる。常人といふ人にかたはられて。きのふやす川に至りて。彼女人買とらんといたせしに。ことたがひて候へば。ひそかに跡につき。追行て奪ひ來れと。常人どの安川に忍びて。下知せられて候へば。よべより。此藪垣の中に隠れ候なりといふ。安世又問けるは。常人は何とて神崎には。歸り住てをるぞといへば。さん候。叔父なる人の。たくはへかくしおかれたる。財どもを。ことごとく堀いだして。同家にすまひて。今は左右なき。長者となられて候。といふに。安世。梅丸に向ひて。常人め。いかにして我うづめ置つる所をしりたるにか。こゝろえぬ事なり。そののみならず。かれ伊賀の國なる。我かくれがに入來りて。皮籠ひとつぬすみて。出行たり。そのうちに。重代つたへたる。大切の鎧一領ありき。たからどもはをしむにたらず。此鎧のみ。いかでとりかへしてん。と思ふなり。かやつ。さまざまの悪行せしうへに。今日娘蘭生をさへ。奪ひとらんとせしは。言語にたへたる悪人。返すぐ不當のやつなり。よしし今に思ひしらせんとて。又盗人に向ひて。おのれ此ま、放ちかへしなば。此よし常人に。告しらせんに疑なし。さらばかやつ。逃かくれんもしるべからず。これによりて。しばしおのれをば。つなぎおくぞとて。庭なる樹にくり置て。又四方山の物語してゐけるに。安世がしもべはせ來りて。土に手をつきて云けるは。御ありかを見うしなひまゐらせて。所々尋ね奉り候所。これなる門に。御あみ笠の見て候へば。これへ参りて候なり。しらせ給ふがごとく。頼光朝臣には。よべより。石山にこもりておはしますなり。とく出たせ給ひなんと申す。安世かさねて梅丸にむかひて。おのれ頼光朝臣とは。はやくより文學のうへにては。師弟のちなみありて。したしくまじらひてあり。

り。きのふ石山にまうで給へりけるに。おのれにかたらふべき事あり。かしこにて對面せんとて。四五日さきに。我かくれが遣使給はりつれば。けふ出たつ道にて。おもひよらず。人々に出あひぬ。いかにや梅丸ぬし。頼光朝臣は。聞えたる武將にて。おはします。御邊おのれと共にかしこにいたり。見参に入給はなんや。さらば昇進し給はんや。がともなりぬべくや。といへば。梅丸しばしうち案じて。みやづかへ。仕らんことは。親とたのみつる人に。告まゐらせずしては。びんなく候。但おもふ所候へば。見参に入奉りて。賊徒誅伐の御支度など。くはしく承りたく存候へば。御供仕りて参り候なんといふ。安世大によろこびて。その親とたのまれし人も。今は世をすて、かくれ住給へりと承れば。そのなりいで給はんをば。よろこばしくこそ。思ひ給はめ。いかでいなみうれ給はんや。ともかくにも。御見参過して。おとひ定め給へ。といへば。蘭生はさらなり。姫も西念も。ともくすゝめそなかせば。さらばとて。裝束きかへ。ゑぼしきて出たつ。安世は具したる従者に。盗人の繩とらせて。いさみたちてぞうちつれ行ける。



近江縣物語卷之五

○石山寺

源の頼光朝臣と聞えけるは。清和天皇の御支流にして。御祖父六孫王經基王。はじめて源氏を給はりてより。代朝家の御守りとして。忠勤をこたらせ給ふ事なし。此君武威の逞きのみならず。和歌の道をさへ好み給ひ。下をあらはれませ給ふ御心ふかくおはしければ。弓矢とるほどの者は。かゝる君も世におはしけりとして。草に風をくはふる如く。なびき従ひて。敬ひかしづき奉りけり。此頃盜賊國々におこりて。さわがしければ。京都に止りおはして。四天王などいへる。いみじき武士におほせて。晝夜皇居を守らせ給ふ。此時御願望の事ありて。昨夜より。石山寺にこもらせ給ひけるが。今日は客殿に入おほして。湖水を眺望しておはします。庭のかたへに。おくれたる櫻の。なごりなう咲こぼれたるを御覽じて。うしろめた。いかでかへらん山櫻。とよめりしも。かゝる時なるべしとて。いたく興じ給へるをりから。めしつぎの侍。御前にまゐりて。安世まゐれるよしを申せば。やがて御前にぞ召れたりける。安世。梅丸をともしひ出て。うや／＼しく寒温を述べかしくまれば。頼光。梅丸にめをつけ給ひて。かれは何ものぞとのたまふ。安世答てまうしけるは。此若者は。幼き時より。おのれがもとに養ひ置て。教たて、候ひけるが。うまれつきさかしきものにて。文武の道よくあきらめとりて候。君に推舉し奉り。ゆく／＼は御家人の數にも。加へさせ給はなんと。わざ／＼今日めしつれ参りて候。と申せば。頼光ほゝゑませ給て。器量こつがらいみじきわかものなり。姓はいかに。名は何といふにか。と問せ給ふ。安世。かれは坂上を以て。姓に呼候へども。實は本姓にては候はず。名は梅丸とつきて候。と聞ゆれば。御かはらけ給はりて。安世とも。時世の御物語どもあり。さて御かたはらなる。宮の中より。包みたる物とり出給ひて。これは。丹波國なる山賤の。もちつたへつる物なりとて。人のあたへつるなり。鬼の角なりといひつたへたれど。いかゞあらん。汝隨定せよとて。梅丸にさづけ給ふ。梅丸手にとりあげて。つく／＼見て申けるは。これは角にてはさふらはず。西洋なる。歐羅巴の西北に。臥兒狼徳と申所の候。その海中に。大きな魚の候。その魚の鬚の上に生ひたる。一の牙にて候。いと長き物にて候を。これはもとをきりとりたる物と見えて候といらへ申せば。人々。魚の鬚に。かばかりの角めきたる物ある事。聞も及ばずとて。梅丸が博識なるをほめあへり。頼光かさねて。此角につきて思ひ出たる事あり。書の泰誓に。如崩其角といふ文あり。人に角あらばこそしかいふべけれ。此文さとしがたし。汝説ありやとのたまふ。梅丸こたへて。厥は厥と通じ候。角は詩に所謂麟之角の角なるべく。さらばひたひを地につくる事かとおぼえ候。既に文選に受化而厥角と見え。漢書にもさる文字見えて候なり。と申せば。大きに興に入給ひて。とし頃の疑ひ。一時にひらけぬ。角につきては。猶問べき事あり。萬葉集に。角のふくれといふ詞あり。いかなる物ぞとのたまふ。これはいまだ覺悟仕候はず。但ふじやうの女を嗤りて。よみたる歌にて候へば。角のふくれは。男陰のことなるべくやとおぼえ候。と申せば。さてはしぐひあひにけむ。といへる詞もおだやかに聞ゆ。とてます／＼梅丸が。頓智をめでさせ給ひけり。さて御かはらけあまたたびめぐりて。弓はひくやとのたまへば。安世。學問のいとまごに。まゝきを射させて候ひき。と申せば。ちとこころみばやとて。御傍なる弓矢とりて。授け給ふ。梅丸手にとり拜して。庭におりたちて。何をかつかうまつらんといふ。をりふし湖水より。みさこの羽をして飛きたるを。見給ひて。あれ射ておとせとのたまふ。梅丸矢うちつがひ。しばし。ねらひかためて。はなちけるに。あやまたず。みさごは。庭なかにはたと落つ。人々射たり／＼。と聲をあげてほむる。頼光殊に感じ給ひて。飛鳥をかく射おとしつるは。末代の養由基ともいひつべし。手練のほど。おそろしき迄におぼえたるはや。とのたまひて。庭におちたるみさごを見やり給ひて。あはれ鳥を射させつるは。我

る。宮の中より。包みたる物とり出給ひて。これは。丹波國なる山賤の。もちつたへつる物なりとて。人のあたへつるなり。鬼の角なりといひつたへたれど。いかゞあらん。汝隨定せよとて。梅丸にさづけ給ふ。梅丸手にとりあげて。つく／＼見て申けるは。これは角にてはさふらはず。西洋なる。歐羅巴の西北に。臥兒狼徳と申所の候。その海中に。大きな魚の候。その魚の鬚の上に生ひたる。一の牙にて候。いと長き物にて候を。これはもとをきりとりたる物と見えて候といらへ申せば。人々。魚の鬚に。かばかりの角めきたる物ある事。聞も及ばずとて。梅丸が博識なるをほめあへり。頼光かさねて。此角につきて思ひ出たる事あり。書の泰誓に。如崩其角といふ文あり。人に角あらばこそしかいふべけれ。此文さとしがたし。汝説ありやとのたまふ。梅丸こたへて。厥は厥と通じ候。角は詩に所謂麟之角の角なるべく。さらばひたひを地につくる事かとおぼえ候。既に文選に受化而厥角と見え。漢書にもさる文字見えて候なり。と申せば。大きに興に入給ひて。とし頃の疑ひ。一時にひらけぬ。角につきては。猶問べき事あり。萬葉集に。角のふくれといふ詞あり。いかなる物ぞとのたまふ。これはいまだ覺悟仕候はず。但ふじやうの女を嗤りて。よみたる歌にて候へば。角のふくれは。男陰のことなるべくやとおぼえ候。と申せば。さてはしぐひあひにけむ。といへる詞もおだやかに聞ゆ。とてます／＼梅丸が。頓智をめでさせ給ひけり。さて御かはらけあまたたびめぐりて。弓はひくやとのたまへば。安世。學問のいとまごに。まゝきを射させて候ひき。と申せば。ちとこころみばやとて。御傍なる弓矢とりて。授け給ふ。梅丸手にとり拜して。庭におりたちて。何をかつかうまつらんといふ。をりふし湖水より。みさこの羽をして飛きたるを。見給ひて。あれ射ておとせとのたまふ。梅丸矢うちつがひ。しばし。ねらひかためて。はなちけるに。あやまたず。みさごは。庭なかにはたと落つ。人々射たり／＼。と聲をあげてほむる。頼光殊に感じ給ひて。飛鳥をかく射おとしつるは。末代の養由基ともいひつべし。手練のほど。おそろしき迄におぼえたるはや。とのたまひて。庭におちたるみさごを見やり給ひて。あはれ鳥を射させつるは。我







あやまりなりけり。かゝるいみじき靈場にて。いたづらなる殺生しつる事。大悲者の御覽し給はんもかしこし。と御後悔の御けしき見えければ。梅丸頭をあげて。おのれも其ころつきて候へども。御説候へば。せひなくつかうまつりて候。但死せざるやうに。いさゝか羽がひをぬひたる斗射候へば。よも死ぬべくはおぼえ候はずとて。走りよりて矢をひきぬきければ。鳥は羽うちて。空さまにのぼりて。とび行けり。かゝるとみの事にさへ。遠慮ありけるよとて。人々こぞりて。ほめのしりけり頼光斜ならず感じ給ひて。うつしの馬のふとくたくましきを。庭にひき出させ。御てづから。さねよきよろひに。劔一ふりそへて。是は當座の引手物ぞとて給はりけり。さて仰せけるは。おことが如き物。我郎等とすべきにあらず。公家へ奏聞をとげて。官爵は。朝議にまかせなん。扱このたび國々に蜂起せる賊等。退治の宣旨蒙りたるは。我したしうせる。藤原の保昌あそんなり。日あらず打たちて。まづ高島にこもりをる。齊明を討とるべくと。此頃其支度最中なり御邊保昌あそんに從ひて。賊徒を討とりて。名をたてむとは。思はずやとの給。梅丸かしこまりて申けるは。齊明はわたくしの敵にて候へば。いかで討とりたく存候を。嬉しき事を承りて候。たゞ御勢に加へ下さるべくといへば。頼光我家人尾張國にすめる者共には。とく觸ながしつかはしたれば。彼等とり／＼に。軍を起し攻のばらんず。前後より相はさみて攻んには。凶徒等みなごろしにせんこと。日を過すべからず。われは内裏の守護にいとまなければ。今より都へ歸りなん。わどのは保昌あそんの營に至りて。とく軍に從ひ出陣すべし。とのたまふ。安世よろこびて。梅丸にむかひて。我はかしこのかくれがに歸りて。藺生にも。此よし語り聞せて悦ばせん。めでたく凱陣の時を待て。對面すべしとて。いとま申て。安世はもと來し道へ引かへす。梅丸は猶御前にありて。さま／＼軍の評定して。給はりたる鎧うちきて。馬に打のり。保昌あそんの館へとうたせ行ける。かしこには保昌待とりて。子細は。頼光あそんの書簡にて。承りぬ。此度の朝敵といふは我弟保輔といふ者。ならびに。甥なる齊明にて候。彼等狼藉いふばかりなければ。人民牢籠して。安き事なし。これによりて。

某強に討手をこひうけ。罷下り候なり。よき計策おはさば。御をしへを蒙りたくと。ねんごろにかたらふに。梅丸も手をつかへて。御軍勢にはより候はんも。こしがらみのわかもの。なんでも御役にか立候べき。たゞ召つれさせ給ひなば。よろこばしくこそ候はめといふ。保昌。梅丸を長押にいざなひ。萬卒は得やすく。一將は得がたし。御邊我軍をたすけ給はんには。今度の合戦。勝利うたがふべきにあらずとて大きによろこびて。盃とり出で。さま／＼にきやうようしけり。それより保昌が軍勢催促するあひだ。爰に止り居て。日をえらみて。出陣をぞしける。

○田村將軍

さても藤原保昌朝臣は。在京の武士。四百餘騎を引率し。まづ齊明をうちとらんと。近江の國高島におしよせ。もみにもうでぞ責たりける。賊徒は山野を家とせる。命しらずのあふれ者なれば。よせくる敵を物ともせず。無二無三にふせぎければ。戦になれし京家の武士共も。すこしいろめきてぞ見えたりける。保昌。此體を見て。今度の討手。某乞求て。罷向ひたるかひもなくこればかりの賊徒のために。數日をおくらん事こそ遺恨なれ。とて計策をめぐらし。上差の鎧に。一通の文を結びつけて。城中へ射られたり。齊明ひらき見るに。その文には。五畿内諸國の大軍。今朝出陣のよし。其聞えあり。貴邊猛威を以て禦るゝとも。多勢にてこれを圍ば。敗北に及ばん事一定なり。早く此寨を去て。他邦に赴き生を全くして。後榮を計給へ。保昌此攻口に在といへども。叔姪のちなみ有を以て。これを告る者なりとぞ書たる。齊明うち見るより。なんでも保昌めが。我を引出さんと。かまへたるなり。いかで計におちいらんやとて。かの文を引さきて。同くうはざしにゆひつけて。射返しける。保昌見て。計こと行はれず。いかせんと愁ひけるを。梅丸すゝみ出で。保昌が耳に口さしよせて。かう／＼計らはやといへば。保昌よろこびて。さらば貴所にまかせまゐらせん。かしこくしおほせ給へかし。と云かはして。ひそかに其計ごとをぞ行ひける。さてそ



の日のくるを待つて。戌の刻とおぼしき頃梅丸陣中を出て。齊明が柵に至り。門外にたゞずみて。鈴鹿の御陣よりの御使なり。門をひらき給へといふ。城中疑ひてためらへば。梅丸かの焼けるの札とり出て。門のしきみのひまより投入ければ。さては味方なりとて。やがて門をひらきていれぬ。梅丸。ひそかに申せとの御使なりといへば。齊明寢所によび入て對面す。梅丸いひけるは。保輔申て候は。かならず柵をかためて守り給ふべし。日あらず。我うち出て。敵のうしろを襲へければ。其時うち出て。戦ひ給ふべし。左右より。はさみてうたんには。保昌がかしら。とりえん事。袋の物を探らんより安かりなん。かく亂軍の中に候へば。おほざうの文はまゐらせず。とてふところより。たゞう紙とり出てわたせば。齊明とりて。水にひたし見れば。しかくのよししるして有。まがふべくもなき。保輔が手跡なれば。いよく心とけて。陣中にぞ留置ける。夜明て梅丸所を見めぐりありきて。あらかじめはかりことをかまへたりける。その日もくれて。齊明。梅丸をまねきて。酒などすゝめ。保輔が陣中の物語などせさせ。おのれも飽まで酔て。うちふしける。しかるに。子の時過る頃。俄に陣中に火おこりぬ。とさわく。齊明おどろき。起出て見れば。陣中四方に火燃あがりたり。城中の者。どよみさわぎて。うちけさんとするに。折ふし風あらく吹て。炎さかんにもえ上りければ。せんかたなく我さきにと。門をひらきて。逃出しぬ。保昌は。四百餘騎に大手の攻口を圍ませ。手勢の中にて。齊明を。よく見知たる兵八十餘人を勝て。搦手を去る事。二十町餘の間にて。こゝの田の畔。かしこの木陰に。五人三人づゝ伏おき。一組に一人づゝ。ほら具を腰にゆひつけ。齊明と見るならば。具を吹べし。其時八十餘人の兵一度によせあひて。いけどるべしとぞかまへたりける。此時齊明。城中にたまりえず。信濃路へとこゝろざし。郎等二人具して。遁れ出。やゝ五十六町落のびて。城の方を見返りたれば。火さかりにもえのぼりて。敵味方の鬨の聲。矢さけびの音。おびたゞしく聞ゆ。さすがの強盗もこゝろおくれ。行まよふ所に。待つけたる保昌が兵。しらせの具を吹たて。八十餘人集りきて。齊明を中にとりこめ。からめとらんとひしめきけり。

齊明いまはかうよと。死ものぐるひに。難たて。勇をふるひて戦ひけれど。梅丸が射たる矢。眉間にとほり。眼くらみて。遂にからめとられけり。保昌斜ならずよろこびて。明なば都へ引べしとて。きびしく警固させけるが。矢疵ふかてなりければ。明を待ずして。しにてけり。打死せる賊等。多衰丸調伏丸夜叉太郎金剛二郎。みな頸を斷て。齊明と共に。梟木にぞかけたりける。此度の勝利は。ひとへに梅丸が軍謀によれりとて。其功を賞して。官軍みな感じあへりけり。猶かくれたる殘黨もぞあるとて。しばらく陣をひかず。ためらひてぞ日を過しける。齊明が一黨亡びうせければ。近郷の百姓等。はじめて安堵の思ひをなし。山おくにかくれたる者ども。資財道具を運び返し。ふたたびもとの家に歸り住て。ひとへに保昌朝臣の。武功をぞ仰ぎたふとびける。此時梅丸は。郎等十騎ばかり。ひきつれて。保昌にもしらせず。ひそかに神崎の里に至りて。常人が家をうかゞひ見るに。安世が家を我物となし。しもべなど。あまためしつかひて。馳の無き間の貂ぼこり。とかいふさまにて。いとくゆたかにくらし居たり。おほかたの人ならばかくぬすびとの。はびこりたる世に。たやすく家居しめて。おほざうなる住居など。すべきにあらねど。常人さきにかれらが社に入て。腕にしるしをさへ。いれずみしたれば。同類のなみにかぞへられて。盗人ども。手ざす事せず。金剛がもとへも。こがねあまたつかはして。わびてければ。慾にふける盗人なれば。やがてうけひきて。罪をゆるして。したしくむつびかはしけるとなり。梅丸。二十町ばかりこなたにて。衣服ぬぎかへて。よごれ垢つきやれはらめきたる。麻の衣着て。たゞひとり。常人が家にぞ往ける。案内を乞て。梅丸こそ參て候へ。いまはよるべなき身となりて候へば。ならひえたる田樂を舞て。けふのいとなみとなして候。いかで見參にいらばやと存て。わざと參りて候。といはせける。常人聞て。蘭生が事も聞かまほしければ。呼いれ對面して云けるは。わぬし。いまは田樂をもて。たづきとなすとや。先きかまほしきは。蘭生殿はいかになりし。わぬしの妻となし給へりなど。ほのかにきゝつるが。いよくさやうにやといふ。梅丸。からうじて。蘭生をあがなひとりて。宿りまでめしつれて候ひし



かど。其夜盜賊の入り来て。いづくへが奪ひ行て。ゆくへもしらず成て候といふ。常人心に思ひけるは。さては我いひつけやりしやつ。俄に異心を生じ。蘭生を奪ひて。おのが物とし。他國に落ゆきけるならん。いかにもして。とり返さばやなど思ひけるが。しらすがほにつくりて。梅丸に向ひて。さて心ぐるしき事を承りて候。ひさみにて見參に入て候へば。のどかに物語もせまほしく候へども。をりふしさがたき。まらうどのきあひて候へば。またこそ對面給はらめ。といひさま。ついたちて入らんとす。奥の方は人あまたむれあて。にぎはしく。笛鼓ならして。打はやす。梅丸常人が袖をひかへて。客人の御入と承れば。さいはひなり。それがしが田樂のひとて。ふつゝかに候へ共。一かなで御覽に入たく候なりといへば。常人うなづきて。これは然るべくおほえ候。奥の間には。田樂する人々兩三人せうじ置たり。御邊の堪能なるは。吾しる所なり。さらばともく立まひ給て。けふの宴席をたすけ給はれ。といひて。田樂どものならびをる。樂屋の内へともなひて入ぬ。それよりさまの田樂こと終りて。梅丸うちさうぞぎ出で。せんず萬歳の酒ほかといふ曲を。おもしろく舞をどりて見せければ。満座興に入て。けふの田樂は。この人につきにたり。異人の。はなかくにことさましなりけりとして。しきりに梅丸をほめのしりて。今ひとて。さるべからんことをと。ひたすらにせむる。常人樂屋に入來て。客人の。いたくめで候へば。いまひとたび。興あることとして見せ給へといふ。梅丸。おのれちか比あらたにつくれる。田村將軍といふ一曲さふらふ。これを舞て御覽に入らせんと。こは後巻して出たてば。鎧かぶとかしたびなんといふ。常人何心なく。ぬりごめに入て。ぬすみとりたる鎧かぶともち出でわたしければ。やがてよそほひさうぞぎで。立出て舞すまし。さてすゝか山の賊徒たひらげしことを。詠につくりて聲をかくのべけるを。みな人おもしろがりて。耳をすましてぞ聞たりける。かゝるに表のかた俄にさわぎで。かしかまし。何ごとぞと聞ば。大將軍保昌あそん。入來り給ふなり。とわめく。常人おどろきて。いかでさる事あらん。もし門たがへして。おはしけるにやなど。いひつゝみれば。門の外に。あまたの士卒ら。たち

ならびて。鎧のかなもの。きら／＼しく光りあひて。螢などのとびかふやうに見ゆ。大將軍馬よりおり給ひて。我家をさして入來給ふをみて。心の鬼に。おそろしくなりて。わな／＼とふるひてをり。有とある見物の男女。みな庭の方へ逃出で。垣おしやぶりて出るもあり。又はたち歸りて。何事ぞとのぞきをるものも有けり。梅丸。常人に向ひて。さな驚給ひそ。おのれ出むかひて。やすく歸し出しまらせん。とて立あがれば。常人鎧の袖をひかへて。をこの事なし給ひそ。大將軍に向ひ奉りて。げすの身の物申べきことやはある。さては我さへいみじき罪にやははん。とく外へ逃出給へ。といふ聲さへ。齒のねあはず。さやうにくるしがり給ふな。われよくこしらへすかしてみんとて。常人が手をふりはらひて。のど／＼とあゆみで出る。常人うち見やりて。たましひも身にそはず。一定梅丸め。ひきくゝられて。うきめやみるらん。さもあらばあれ。大將軍の。何とて爰に入來給へると。障子のひまより。覗きみたるに。梅丸表の方に出て會釋すれば。大將軍座につき給ひ。うや／＼しく禮をなして。梅丸にうちむかはせ給ひ。何事か物語しておはす。常人耳をそばだてゝまきに。よくも聞えず。大將軍の御聲にて。さてもさねよき具足にて候。との給御聲。ほの／＼と聞ゆ。いよく心もえず。うかゞひみたるに。大將軍又しきだしいし給ひて。かしこにて待つけ奉らんとて。立あがりて出ておはす。あまたの軍兵左右にならびて。いみじく警固して出て行。梅丸おくりまゐらせて立歸り。奥さまに入て見れば。常人面はさながら土のごとく成て。口うちあきてふるひをり。梅丸うちわらひて。いかに常人汝我師のをしへを守らず。ぬすびとにおちあぶれて。おなじかざしの名をさへけがしつゝ。かにや我師安世どの。たからとし給ふ。相傳の御きせながは。此鎧にてあるかといへば。いよく膽つぶれて。さてはことあらはれぬと思ひて。逃出んとするを。梅丸聲をあげて。ものども來りてからめよ。とよばはれば。表の方より士卒十騎ばかり入來て。常人をとつておさへ。たかてこてにくゝりあげつ。梅丸ひけるは。我ははじめより。名のりて汝を捕ふべけれど。汝逃かくるゝのみならず。此鎧いかにしなすらす。と思ひはかりて。扱かくはかまへたるなり。とい



へば。常人恐れて魂も身にそはず。されどへらぬさまにて云けるは。扱は汝俄になりのほりて。つかさをもえたるよな。いかで蘭生を吾妻となし。汝も安世も。なき物にせんと思ひたりしに。その事ひとつもかなはて。鎧さへとりかへされつる。くちをしさよ。夢にだもかゝりとしらば。その鎧水の底にも沈め。火にも入て焼てましを。吾てづから出て。汝に着せて返せしは。あさましきまで。おろかなりしといひて。足ずりして。身をふるはず。梅丸は田樂どもが。うちすて置たる扇とりあげて。おしひらき。三尺の劍の光は氷手ありと。たかやかにうたひければ。郎等ども。笛つゞみなど。てんでにとりて。一張の弓の勢は月心にあたり。とうたひはやして。一度には。と笑ひて。常人が繩をとりて。どよめきいさみて。出行ける。後にきけば。常人は公家の御さたとして。きかいが島へながしつかはされけるとなん。

おうどんげ

こゝに尾張にありける。嵯峨の左衛門は。梅丸にいひつけて。都へ出したてやりて後。やまやまひおこたりはてけるころ。大宮司來りていひけるは。頼光朝臣より。竊に御使給はりて。國々にある源氏の御家人ばら。いそぎはせむかひて。賊徒をうちほろぼすべきよし。御説ありて。此國の武士ども。その支度して候なり。御身つかへをかへし給ひ。隱遁の御身ながら。かゝる時は。ひきこもりおはすべきならず。いそぎうつたち給ひて。凶徒を亡し給はなん。しかるべき物の具は。所持して候へば。えらびとらせ給て。用ひさせ給へといふ。左衛門うなづきて。よくこそ告給ひつれ。我老たりといへども。みすく朝敵となるやつばら。見のがすべきにあらず。いそぎ罷りむかひなんとてそれより所々の武士を催促しけるに。三百騎半ぞ集りける。陸をゆかば。日數かゝりぬへしとて。よびつぎの濱より船に打のりて。たゞちに伊勢國におしわたり。いきほひ猛に打てゆく。かねてより。源氏の武威のおそろしきこと

を。きゝおちしたるぬすびと共。軍勢の向ふなりときくより。蜘蛛の子をちらす如く。十方へちりてぞ。逃うせける。左衛門軍勢を下知して。鈴鹿山へと向ひけるに。きのふ高島の柵やぶれて。齊明その外むわとたのみたる者ども。とことく打死しぬと聞えければ。盗人どもたまりあへず。如法貪慾のこゝろより。一旦は從ひなびきけれど。かく危急の時にのぞみては。誰かは一人も踏とゞまりをるべき。みないひあはせたるごとく。ちりんに成て落うせぬ。今はたゞ十騎あまりぞのこりたる。袴だれ思ひけるは。かくてははなんしき。いくせん事かなふべからず。敵のちかづかざるほどに。とく落ゆくべしとて。十人の者ども。みな鎧ぬぎすて。簀笠うちきて。いづくともなく逃出てぞ行ける。されど天命遁るゝ所なく。結句は京都において。四天王のために。命をおとしけるとぞいひ傳へたる。尾張の國の軍勢は。柵ちかく責よせて。鬨の聲をあげたれど。打出る敵も見えず。人をいれてうかどはせけるに。はやう落うせて候なりといへば。左衛門下知して。火をかけて。賊營を焼はらはせ。かちどきつくりて。都の方へとぞうたせける。さて又藤原の保昌は。近江の賊を。うちたひらげて。梅丸をいざなひて。そのよし奏聞を遂ければ。観感ことにあさからずして。保昌をば。丹後守になされ。扱梅丸が文武のざえを。ほめさせ給ひて。近江掾にぞなされける。各朝恩のかたじけなきことを。拜謝し奉りて退きける。それより梅丸は。保昌あそんにひきわかれて。師頼光あそんの御館にいたりけるに。門前には。尾張の國の軍勢いさましげにならびてをり。梅丸門を入て見れば。師なりける安世。とく爰にありて。出むかへて。凱陣のよろこびをのべ。かつ傳來の具足とりかへしつる事。ひとへにそこのいさをなりと悦びいひて。けふなん我娘老母をもりて來りて。御館の内にとどめ置たり。先御見參過して。人にも逢給へとて。うちつれだちて。頼光の御まへにぞ出ける。頼光あそん。とく見給ふより。梅丸はやくぞ歸りきつる。わどのが功にて。凶徒たひらぎぬる事。保昌あそんの文にて。つまびらかに知りぬ。今日朝廷にて近江掾に任じ給へる事。今のほど聞及びつ。さこそよるこぼしからめ。とのたまへば。梅丸頭をさげて。これおのれが功には候



はず。ひとへに君の御威徳のかゞやける餘りに候といらへ申す。さて御かはらけ給ひて。われ梅丸にひとつの望有のぞみありうけひくべくや。との給。梅丸かしこまりて。御説ごせつて候へば。いかなる事なりとも。いなみ奉るべきやう候はずと申せば。我家わがいえに。譜代ふだいの老臣らうしんあり。いま六旬餘ろくじゆんじゆに及びぬれど。嗣子ししなくて。明あきくれ是こゝを愁うれひをり。わどのかれが子こと成なて。終すまひりを見とゞけやらんには。われも又またわりなきよろこび。これに過すまたる事ことなからん。とのたまへば。梅丸うめまる。御説ごせつすまひ奉らんやうは。候はねど。さきに旅館りやくわんにて。親子おやこの契ちぎなせし。老人らうじんの候へば。またも異人ことひとを親おやとし候はん事こと。義ぎにおいて安やすからず候へば。此事このこと計はかりはすみやかに。御答ごたへ仕つかまつりがたく候まはといらふ。頼光よりみつさてはせんかたなし。されどわどのが如ごとき若者わかものある事こと。老臣らうしんどもにも見せばやと思ふなり。それ／＼とのたまへば。めしつぎの侍さむらいひきつれ出いでたるをみれば。大紋だいもんにたてゑほしきて。はら巻まきしたる老武者らうむしゃ御まへに出いでてかしくまる。頼光よりみつ老人らうじんのなくさめに。よき若者わかものを見せむとて。呼よび出しつるなり。此若武者このわかむしゃこそ。此度このたび近江あまのの強賊かぢやく齊明せいめいを。計はかりごとを以もつてうちほろぼし。未曾みづか有あの高名たかのみなしたる者ものなれ。よく見しりてあれとのたまふ。老武者らうむしゃすなはち頭かしらをあげて。めをしほりて見やりけるが。驚おどろきあわて。やおれ梅丸うめまるにこそといふに。梅丸うめまるかしらをあげて見れば。尾張おわりにて親子おやこの約やくをせし。嵯峨さかの左衛門さゑもんなりければ。あざみおどろきて。親人おやぢ。いかでとく都みやこにはのぼり給ひし。いかに御ごこゝちは。すくやかにならせ給ひつや。とみさりよりてかたらふ。頼光よりみつも浅あましがり給ひて。さてはとく親子おやこの契ちぎりなせしこそ思はずなれ。われなかだちして。父子ふしのむせびさせてんと思ひしは。おそかりけりとの給ひて。御ごよろこび斜たぐならず。ふたゞ梅丸うめまるにのたまひけるは。此ものこそ我家わがいえの老臣らうしんにて。藤原ふじわらの仲光なかつひが弟おとにて季光すゑみつといへる者ものなれ。年頃としごろ嵯峨野さかに。かくれ住すまてありしが。父ちちの殿とのにもひさしくつかへて。無二むにの忠臣ちゆうしんなりしかば。われも鷹狩たかがりのついであれば。たちよりて。たえずとひおとづれし事こともありき。このたびふしぎに。尾張おわりの國くににありて。かしこより責せきのぼりたる事ことは。我われさへけふはじめて知したりき。わどのら父子ふしのやくを結びし事ことは。我心わがこゝろに符合ふあして。かばかりよろこばしき事ことはあらずと。御ごよろこび大方おほかた

ならず。季光すゑみつつゝしんで。すのまたにて。はじめて逢あしり親子おやこのちなみむすびける事ことなど。こまやかに語り聞きえてかく思おもひがけなく。對面たいめんしつるも。偏ひとへに君きみの御めぐみなりとてかしくまる。頼光よりみつかされて。今の程いまのほど安世やすよが物語ものがたりにて聞きけば。家族かきぞのともがらをも。あてきたれるよし。こゝに呼よびかれて。のどかに對面たいめんすべし。われは父新發ちちしんはつ意いどのゝもとへ。此このよししらせまゐらすべき文ふみかきて。奉たてまつらんとて。たちて奥おくの間まへいらせ給ひぬ。安世やすよそゝろに悦よろこびて。娘むすめ蘭生らんせいを呼よびかれて。季光すゑみつに對面たいめんせさす。季光すゑみつ。蘭生らんせいがかたちのすぐれたるを見て。あはれよき嫁よめの君きみをまうけつとて。よろこべば。梅丸うめまる。蘭生らんせいに向むかひて。袋ふくろのうば君きみは。などてともなはざりしといへば。蘭生らんせい。かしこの一間ひつまにおはすなり。伴ともなひまゐらせんと申候まをしへど。かゝるいま／＼しき身みは。かしこき御ごあたりへは。はゞかりあり。かつ松まつのおもはん事ことも。はづかしとの給て。すまひて出いでもやり給はねば。みつからひとり参まゐりて候まはといふ。梅丸うめまる安世やすよにむかひていひけるは。さきに石山いしやまにて。初はじめて殿とのに見参けんさんに入候いれ時とき。わ君我姓きみわがせいを坂上さかのうえと呼よび候まはは。本姓ほんせいにはあらぬよし聞きえ給ひき。此事このこといぶかしければ。くはしく承うけたまはまほしく候ひつれど。出陣しゆつじんのをりからなれば。とひ奉たてまつらて出いでたち候ひき。我本姓わがほんせい別に候事こと。こゝろえず。くはしくかたらせ給へといへば。安世やすようちわらひて。御邊ごへんをさなき時ときなれば知しり給はじ。かの田樂でんがくして世よをわたれりし。坂上さかのうえの猿丸さるまるは。御身ごみのまことの父ちちにはあらず。といふに。梅丸うめまる驚おどて。いかに／＼と。眉まゆをしはめてとへば。今いまより二十年にじゅうねんばかりむかしなりき。猿丸さるまる。田樂でんがくして都みやこにのぼりて。三ツ計はつかりのみどり子をいだきて。歸かへりきたりて。これは旅たびにてひろひえたりとて。乳ちちをもらひて。育そだてやしなひけるが。兒このおひたつを見て。ひろひえし子こなりといはゞ。あだし心こゝろもいでこん物ものぞと。ちかしき人ひとにも口くちかためてそのよし兒こにもかたりも出いでざりき。此事このことしりたるは。我われのみならず。一村ひとむらのうち。老おいたるものは。みなよくしりてをり。その時のひろい子こといふは。御邊ごへんにてさふらふ。しかるに。さきに。頼光よりみつ君きみの姓氏せうしをとせ給時たまひ。いつはりて聞きゆべきならねば。つゝまで申まをするなりと語かたる。さらば我本姓わがほんせいは。たれによりて。問とひあきらめ候まはべきやといへば。安世やすよ。われも又またしりえず。されど御身ごみに。か



たみとて。のこしつる。猿丸が一品こそ。こゝろにくけれ。ひらきて見給へといふに。梅丸。蘭生にむかひて。例の品これへといふ。蘭生。常にかたはらはなさずもちて候へども。只今これへ参り候とて。西念法師にあづけ置てさむらふといふ。安世聲あげて。西念こなたへとよべば。侍とりつぎて。西念をみてきたり。梅丸。西念がもちたる袋物とりて。封をひらけば。三重計に封じてあり打あけてみれば。一通の文あり。うはがきに。梅丸どのへ猿丸。と書たり。よみ見れば。おのれは。そのまことの父にて候はず。過し康保元年三月十九日。山城の國舟岡の山にて。ふしぎにひろひ取て。育てやしなひて候なり。こゝに封じ置し笏は。其時御身とともに。ひろひえし物なり。とよみあぐるに。季光のびあがりて。何とかくと聞ききたつる。梅丸猶よみみれば。生長の後。まことの父母にめぐりあひたまはん。しるしともなるべくと。そへ置て候なり。とよみもをはず。梅丸悲歎の涙にくれけるが。あまたよび笏をおしいたゞきて。これこそまことの父母の御かたみなれとて。身にひし／＼とつけて。涙おとせば。季光いぶかしげなるおもちして。その笏われに見せ給へと。手に取見て。これこそ我子愛丸が死しける時。こしにさゝせて埋めつる笏なれ。いかでその物のこゝにはあると。めを大きになして不審すれば。安世うちきくより。此笏。なくなり給ひし兒の。こしにさゝせて葬り給へるとあるに。猿丸が遺言をあはせて。年月をかぞへ見れば。もしそののたまふなる。愛丸と名づけし兒は。此梅丸にてはあらずやといへば。季光かしらうちふりて。いな／＼穴をふかくほらせ。うづめ葬りつれば。よみがへりたればとて。ふたよび此世に出べきにあらず。といふ。さるにても此笏。まさしく梅丸がもとにありしこそ。こゝろえねとて。人々もろ手くみて。頭打傾つ。いぶかし／＼といひひたるに。西念うしろにをりて。聲うちあげて。南無觀世音。とたからかに。唱へたるを。人々驚てふりむき見れば。西念。赤かちのやうなる涙を。瀧のやうにおとしつ。すゞみ出て云けるは。さて／＼ふしぎなる事を。めのまへに見て候事かな。人々に聞えんも。老法師が身の恥辱と存。これ迄は。つゞみ候へどもおのれが黙しをらんには。人々の御不審

のはるべき道理も候はねば。恥をすて。過にしむかし物語聞え奉るなり。愚僧男にて候時は。狼冠者と人によばれ。山城の國。田原の郷に住て候ひけるが。あけくれ博奕にのみ心をいれて。放逸無慙のふるまひのみ。仕り。親族一門にも。見はなされ。乞丐の身となりはて。舟岡山のわたりにも。もこよひて候時。康保元年やよひの頃。いみじき人の。をさな子の。野へ送りありて。玩物調度金銀さへ。揃うづめ給ふとき。俄に例の慾心おこり。夜にまぎれて。かしこに至り。人みぬほどに。ほりうがちて。調度の類は包におし入れ。持歸らんと存せしが。幼き人の死骸の腰に。物の見えて候へば。引ぬきとらんといたせしに。思ひもよらず。此兒のよみがへりて泣出しぬ。をりから松ともして。旅人のきたれるあれば見つけられじと忍びたるに。かの旅人。兒をいただき。包をおひてゆかんとす。やらじとどめて。しばしが程うちあひて候へど。きやつ強力の男にて。おのれをとつて。四五間ばかり。ほうど投て候へば。塚穴の中におち入て。こしをいためて悶絶せるほど。兒と包を引さらへ。いづちいけん。影も見えず。猶のこれる物やあると。そこらさぐりて見てあれば。ちひさきあしだの。手にあたり候ま。これを兩の手にもちて。みざりばひして歸りて候。其夜の夢に。老僧一人來り給ひて。此あしだ大事として秘めおくべし。おのれ。成佛すべき。因縁あれば。いまより行ひをあらため。發心修行すべし。との給と見て。夢はさめぬ。それよりひたすら道心者と成て。抖擻修行して。かくてさまよひ候なり。扱は其夜の旅人は。坂上の猿丸どのにて。掘いだせし兒と申は。梅丸君にてぞおほしける。吾また梅丸の君に。命たすけられしも。おもへばふしぎの因縁なりとて。首にかけたる包ひらきて。ちひさきあしだとり出て見するを。季光はやく手にとりあげて。これこそ満仲の君より。兒がもとへ給はりし物なれ。おもてにから花を多きたるは。巨勢の廣高が筆のあとなり。さては養子と思ひし梅丸は。我肉身わけし。子にてありけるかとて。とりつきてむせびなく。梅丸も手をあはせつ。思はずまことの親にめぐりあひ奉れる事。神明佛陀の御加護なりと。親子互に手とりかはして。しばし涙にぞくれにける。季光目しばたゞき



て。二十年まへに。死わかれしと思ひし。我子に。かうふたゞびめぐりあひしは。盲龜の浮木。うどんげの咲出しよ  
 りは。希有の事なり。あはれ。つれそひし。姫の。けふまでながらへありて。かゝるうれしきむしろにあらば。さぞ  
 さぞよろこびおほまはましを。ぬすびとのためにころされて。いのちうしなひてし。口をしさよとなげけば。梅丸。一  
 日の孝をもなさず。御顔をだに拜し奉らざりしは。いかなる宿世なりけんとして。聲をあげて泣いだす。かゝるに。  
 ひとまのうちさわがしく。よゝゝとなく聲すれば。何者ぞとて。安世障子おしあけて見れば。袋のうば。疊にうち  
 ふして。前後もしらなきさけびて。身もうきぬべく。ふししづみをり。安世たちより。何事有て。さは泣給ぞとい  
 へば。姫頭をあげて。季光どのなつかしやといふ。季光又おどろきて見ればとしごろむつびかはせし。我妻なり。い  
 かなながらへてありけるが。と聲ふるはしてとふ。梅丸蘭生もおどろきて。うち守りをれば。姫泪をおさへて。かし  
 このひとまにためらひみればあやしき詞のはし。聞えけるま。今のほど障子のあなたに。はひより来て。うか  
 かひみて候へば。おもひよらざる物語どもに。うれしさの胸にせまりて。おほえず聲をあげて候なり。といひて。梅  
 丸がもとにゐざりよりて。他人なりと。けさまでも思ひしは。我うみつる。愛丸にてありけるよとて。とりつきてな  
 く。梅丸はあまりに思はずなる事にてあれば。たゞあきれて詞も出ず。季光もおなじく。あきたるさまにて。姫に  
 むかひて。おことは盗人のために。くびきられて死けりと。家司なる兵藤太夫が物語にて。聞たれば。此世になき人  
 とのみ思ひてありしに。いかて命ながらへてありし。といへば。姫。御身のあつたに。くだり給ひし後俄に盗人の入  
 來れば。うろたへて。逃出んとせし時。愛丸がめとなる右近が。ひきとどめて盗人は。あるじなりと見候へば。い  
 みしうせめて。財のありかななど。とひ聞物にて候。はやくその衣ぬがせ給ひて。げす女のふりして。出させ給へとを  
 しへしかば。ことわりと思ひて。くりやに有し。下女の衣にきかへて。あわて迷て逃出ぬ。かのめとなる右近は。  
 我ぬぎすてし。ひはだの衣とりて。うちきたりけるが。さてはぬす人にあひて。ころされたるなんめり。あはれ我命に

かはりて死うせしこそかは申けれとて。又袖をかほにあてゝぞ泣ける。梅丸は。さてはまことの母人こそおはしけ  
 れ。おもはず此日頃不禮をのみ仕りき。とて。頼に手をあてゝいふ。季光かさねて問けるは。いかなる事にて御こ  
 とは。今日この御館に入きて有しといへば。姫目おしのごひて。はからずぬすびとにとらへられて。うきめみたるを。梅  
 丸來りて。あがなひ出し。けふまで母となして。あがめやしなひたるとかたれば。季光手をうちて。われも梅丸を。實の子  
 なりとはしらで。養子の契りをむすびたる。其所は隔たれど。おことも又彼をかりの子となせしは。ふしぎといふに  
 もあまりあり。といへば。姫。是みな觀音のし給へるなりとて。手をあはせてかつくをがむ。思へば過しむかし。  
 初瀬に通夜しける時。枕がみに立おはして。やしなはれんことは安しと。告給ひしは。今よりゆくすゑの事なるべし  
 とて。夫婦やうゝに。ゑみを合てよろこびけり。梅丸は膝うちたゞき。天を拜してよろこぶ。蘭生は老母をいたは  
 りて。背をなでさすりて。あつかひ物す。安世かはらけとり出て。めづらしいといふにもあまりある。御親子の御對  
 面にて候へば。いざゝめてたく。ひとつうけ給へとて。ながへとりて。季光にすゝめ。おのゝすんながれに。酒  
 くみかはしてよろこびけり。西念いひけるは。梅丸君と蘭生君。いまだ婚姻の盃し給はず。けふ此ついでに。合衆の  
 禮行ひ給ひなんといふ。季光。いかで今までさる事をも。せざりしといへば。姫。此ことは。さきにわらはも。すゝめ  
 候ひつれど。父君にしらせ奉らで。わたくしに行ふべきかはとて。かれがあながちに。うけひかさざりしなり。と語  
 る。かゝるにおもひかけず。へだての障子ひらきければ。人々見てあれば。御あるじ頼光君打ゑみて立おはす。侍臣  
 の面々。つかさねに土器のせて。持出るもあり。又すはまの臺。持出るも有。なにくれのさかななど。あまた持出  
 て人々のまへにすゑおく。頼光のたまひけるは。婚姻の禮。媒にあらざれば物せずとか。聞およぶ。我なかだちとな  
 りて。ながく朱陳の榮を見んとすとの給。人々はたゞかたじけなさの身にあまりて。頭をだにあげずうつぶしをり。  
 頼光。侍臣に仰せて梅丸蘭生に。かはらけとりかはさせ給ひ。御みづからうちあげて。あなたふと今日の尊さ。どう



たひ出し給。御傍の人々も。とり／＼いはひことぶきたる。さき草の聲も。げに此殿のみかげなりけりと。人々よろこぶ。酒宴ことはて。頼光人々にたまひけるは。くはしき事は。障子をへだて、聞すましつ。そも假の親子の契りなせしは返りてまことの親子なりし。これ希有の因縁なり。つたへてながき世の物語ともすべかんめり。蘭生が賊營にとらはれと成て。智を以てその身を汚さず。再夫にめぐりあひしは。女中の丈夫。まことに安世が娘といふべし。梅丸よくあはれみて。ながく老を以にすべし。梅丸が文武に長じたるは。ひとへに師の安世がをしへの嚴なるによれり。かまへて一家に養ひて。終身ねんごろにけうやう怠らざるべし。めのとの右近が主にかはりて死したる。返す／＼あはれなり。西念が發心のはじめは。觀音のし給へるにて。しかも修行の堅固なりし事。尋常の法師にことなり。かれが生れ出たる。田原の郷は。さいはひ我しる所なり。かねて父新發意殿の宿志にて。一字のがらん建立の心あれば。かしこに一寺をたて。西念を以て住持となし。右近が亡靈を弔はしむべし。梅丸がひととなりしは。またく觀音の靈驗。しかしながら。猿丸が慈心のはごくみによれるなれば。ひとかたならぬ。洪恩なり。かれが遺言の文をうづめて。塚をきづきて。其あとをのこすべしと。のころかたなきめぐみの詞に。人々はたゞよろこび泣に泣て。こといみもしあへず。袖をしほりぬ。ざるは末の世にいたりて。猿丸塚。又猿丸たふげなど。よびつけて。田原の郷にその跡をそのこしける。梅丸それより。父の住ける。白河の家を修理しつくりて。うつり住けるに。安世。季光がもとにありし。郎等女ばらなど所々にちりあがれたりしものども。聞つたへて。われも／＼と歸りきてつかへければ。むかしにはまさりて。にぎはしくぞ成ける。かくて季光。安世を別室に住せ。朝暮孝養をこたらず。さていみじき子どもあまたうみつづけて。つかさくらゐ。ます／＼すゝみて。もよとせの榮花をきはめ。めてたく一期を過しけるとなん。此卷々の草子をなづけて。近江縣物語とよぶことは。梅丸が任所にありて人々に語りけるを。そのまゝに書つければなるべし。

近江縣物語卷之五大尾

六樹園のうし旅より歸りつきてのちいつまきのふみとり出てこれかきよかきしてよとておのれにたひつもちかへりてよみ見るにけにおかしく興ある事ともそおほかるされとうしの常の筆つかひにも似すもはらさとひたることのはもてつゝけられしはをさなき人のよみ見んときこゝろえやすからんためとにやうはかきにあふみあかたの物語とするせるは萬葉集に見えたるあをみつらの歌をおもひてなづけ給へりけん此物語せる翁のさまけしうはあらざりきさためてりふをうなといへる人の身をかへてうまれ出たるにやとうしのかたられたるいかなるゆゑありけるにかそのしさいはしらすかし

夙興亭高行

しるす



昭和三年十二月二十四日印  
昭和三年十二月廿五日發行

特製  
第八回配本  
追加募集  
第四回配本

【非賣品】

帝國文庫  
(第一篇)  
珍本全集

編輯者兼  
發行所  
右代表者  
取締役社長

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地  
株式會社  
大橋勇吉  
印刷者  
君島潔

發行所

株式會社

博文館

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

振替口座東京二四〇番

製函所  
製本所  
製紙所  
印刷所

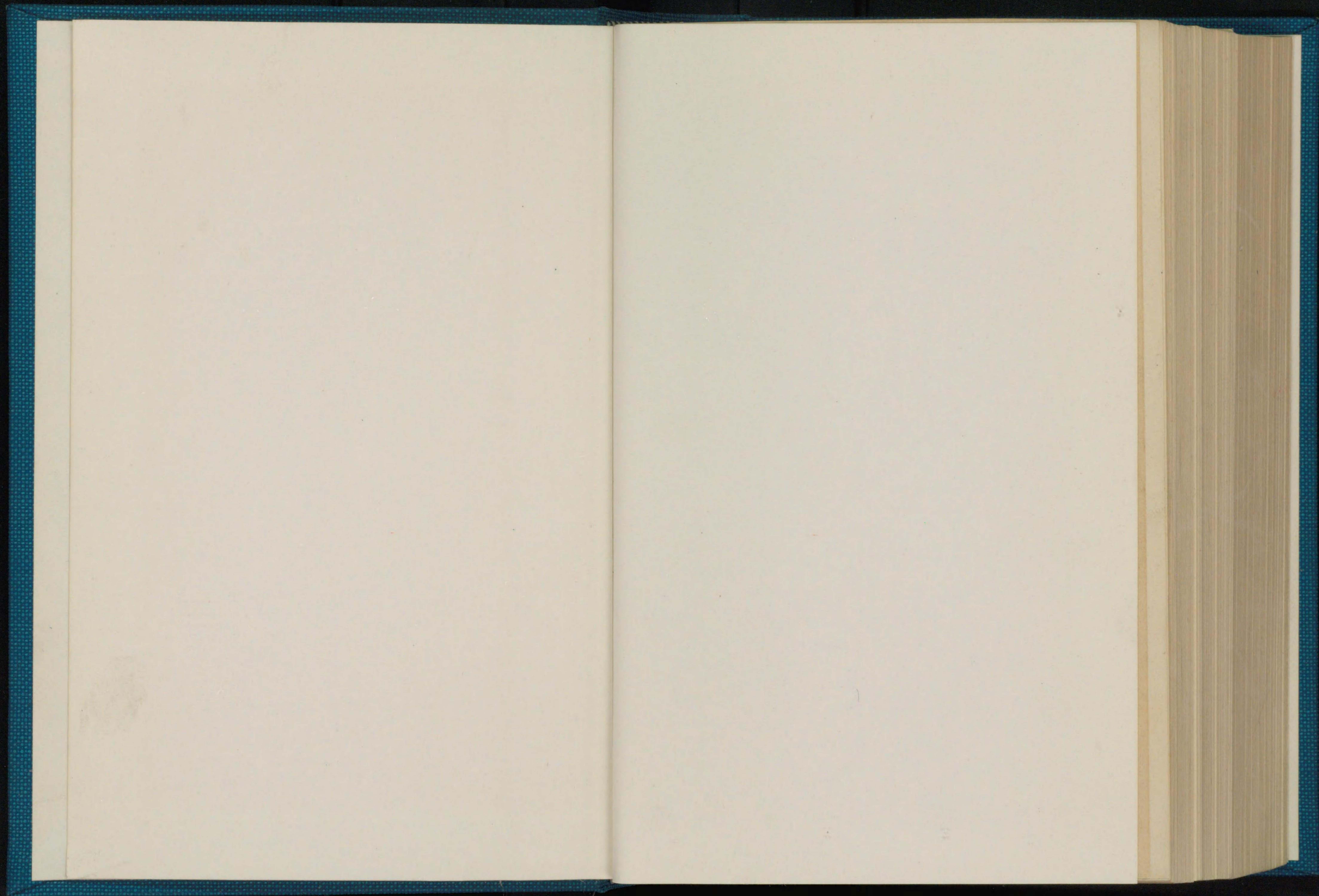
共同印刷株式會社  
共同印刷株式會社  
王子製紙株式會社  
井上製本所  
香取製函所



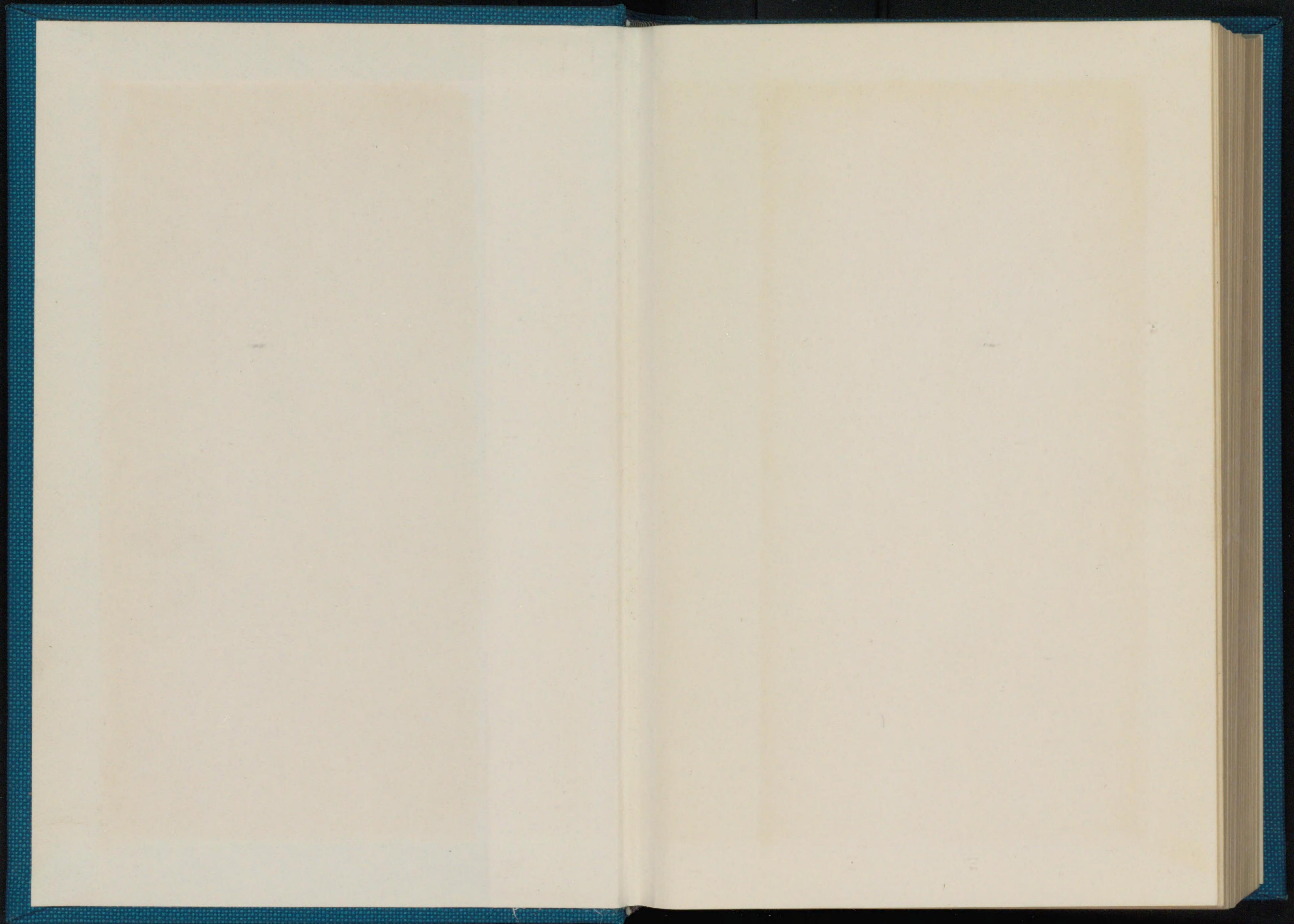
41-41-20

<p>昭和二十二年 三月二十一日</p>	<p>東京 第一編</p>	<p>東京 第二編</p>	<p>東京 第三編</p>	<p>東京 第四編</p>	<p>東京 第五編</p>	<p>東京 第六編</p>	<p>東京 第七編</p>	<p>東京 第八編</p>	<p>東京 第九編</p>	<p>東京 第十編</p>
--------------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------

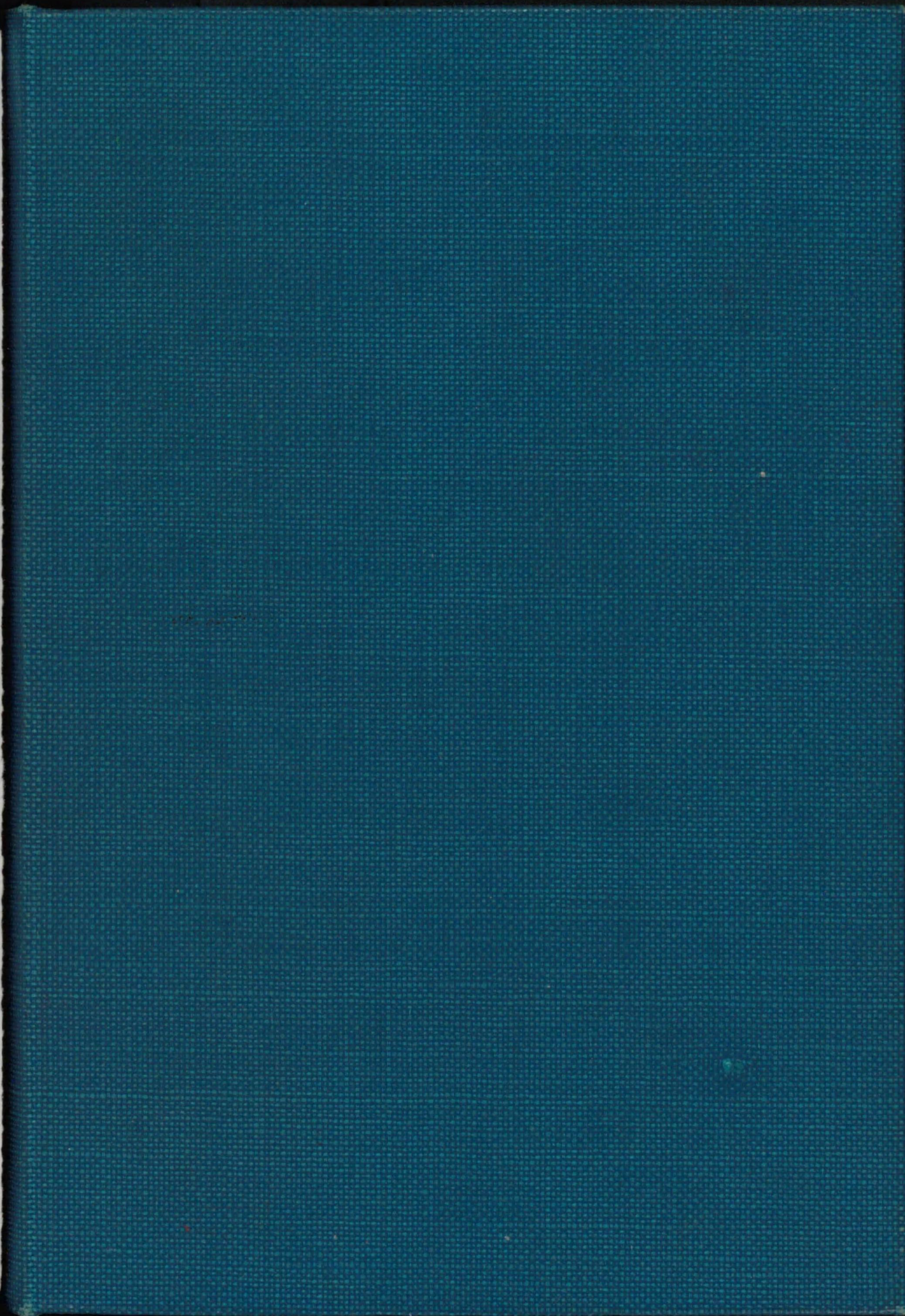
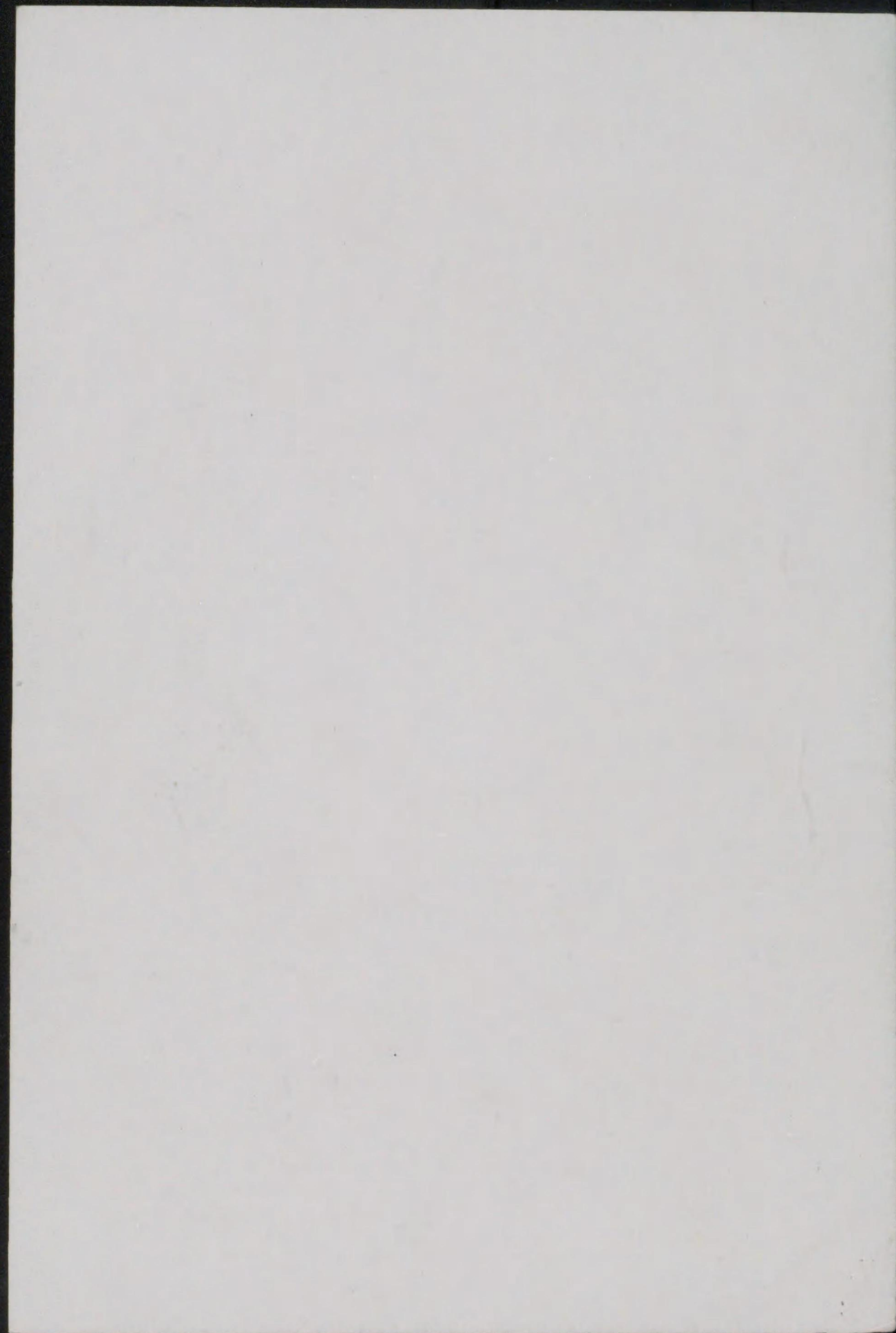












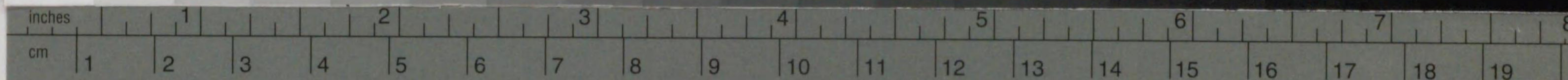


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

